

山口県埋蔵文化財調査報告第101集

# 坂ノ上遺跡

— 豊浦郡菊川町 —

1987

財団法人山口県教育財団  
山口県教育委員会

## 序

近年、農業基盤整備事業が次第に進展をみせてきておりますが、これとともに、県下各地の埋蔵文化財が掘り起こされ消失していく頻度も多くなってまいりました。

私達の県土山口を築いてきた先人達の、その永い営みを今に伝える数多くの歴史遺産を、こうした開発との調整を図りつつ記録にとどめて後世に残すため、財団法人山口県教育財団では教育・文化の振興という立場から、本年度も山口県農林部の委託を受け、圃場整備地区に係ります埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。

ここに報告いたしました豊浦郡菊川町所在の坂ノ上遺跡の調査では、中世後期から近世初頭を中心とする集落跡・墓地等が発掘され、とくに墓地からは土器や陶磁器など多くの遺物が発見されました。

これらの資料は、当時の人々の生活や文化を知る上で、また、菊川の地が果たした歴史的役割を考える上で、貴重な資料を提供してくれました。

発掘調査の成果をまとめた本書が、学術・教育の資料として利用されることはもとより、ふるさとづくりの基礎資料として広く活用されることを期待するものであります。

おわりに、調査にあたりまして御指導・御協力をいただきました関係各位に対し、深甚なる謝意を表するものであります。

昭和62年2月

財団法人 山口県教育財団

理事長 井上謙治

## 序

本県では、恵まれた自然環境の中で豊かな地域社会の実現に向けて、農業基盤整備事業等の諸施策を推進しています。

山口県教育委員会では、こうした開発工事から故郷のかけがえのない埋蔵文化財を保護し、合わせて開発と文化財保護との調和のとれた県土づくりを目指して関係機関と協議を重ねるとともに、遺跡の保存や発掘調査を実施しているところです。

昭和61年度には、豊浦郡菊川町にある坂ノ上遺跡について発掘調査を実施し、中世から近世初頭にかけての集落・墓地跡等を明らかにするとともに、当時の人々の生活や文化を知る上で貴重な資料を数多く得ることができました。

本書は、この調査成果をまとめた記録であり、文化財愛護への理解を深め、教育並びに学術研究上の基礎資料として広く活用されることを願うものであります。

おわりに、発掘調査の実施にあたり御協力をいただいた関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

昭和62年2月

山口県教育委員会

教育長 高山 治

# 例 言

1. 本書は、県営圃場整備事業に先立って昭和61年度に実施した豊浦郡菊川町大字上岡枝に所在する坂ノ上遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書は、財団法人山口県教育財団が山口県農林部の委託を受けて実施した調査と、文化庁国庫補助金を得て山口県教育委員会が実施した調査の成果を合わせ報告するものである。
3. 調査組織は次のとおりである。

調査主体 財団法人山口県教育財団（理事長 井上謙治）

山口県教育委員会（教育長 高山 治）

事務局 財団法人山口県教育財団（事務局長 田中義人）

山口県教育委員会文化課（課長 東 章）

調査担当 [総括] 山口県埋蔵文化財センター（所長 東 章）

（次長 中村徹也）

（主任 松岡睦彦）

[調査員] 財団法人山口県教育財団事務局 指導主事 大村秀典

山口県埋蔵文化財センター 文化財専門員 乗安和二三

同 調査補助員 木村明史

[援助] 山口県埋蔵文化財センター職員

4. 発掘調査の実施にあたっては、山口県農林部耕地課・山口県下関土地改良事務所・菊川町役場・菊川町教育委員会および地元関係各位から多大な援助・協力を受けた。
5. 出土人骨の調査については、九州大学医学部解剖学教室第二講座助手田中良之氏の援助を受け、鑑定所見をいただいた。また、出土陶磁器の鑑定については、名古屋大学文学部教授檜崎彰一氏・山口県立美術館学芸課主任榎本徹氏の指導・助言を得た。
6. 出土遺物の整理については、山口県埋蔵文化財センター長沼昭乃・増田真由美・大村真澄・永久早苗・葛山清美・江見訓子の協力を得るとともに、遺物実測については、奈良大学学生永見秀徳氏の協力を受けた。
7. 本書に掲載した地図は、国土地理院発行25,000分の1地形図「田部」を複製使用したものである。
8. 本書に使用した方位は、個別の遺構（井戸・土壇・墓）は磁北、掘立柱建物を含むその他の遺構は国土座標の北で示し、レベルは海拔標高で標示した。
9. 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。  
SB：掘立柱建物 SD：溝 SE：井戸 SK：土壇 SP：柱穴 ST：墓
10. 本書の作成・執筆は、中村の助言・指導を得て大村（Ⅰ,Ⅳ-1・2・4）・乗安（Ⅱ,Ⅲ,Ⅳ-5・6・7,Ⅴ-1・3,Ⅵ）・木村（Ⅳ-3,Ⅴ-2・4・5）が分担し、乗安が編集した。

# 目 次

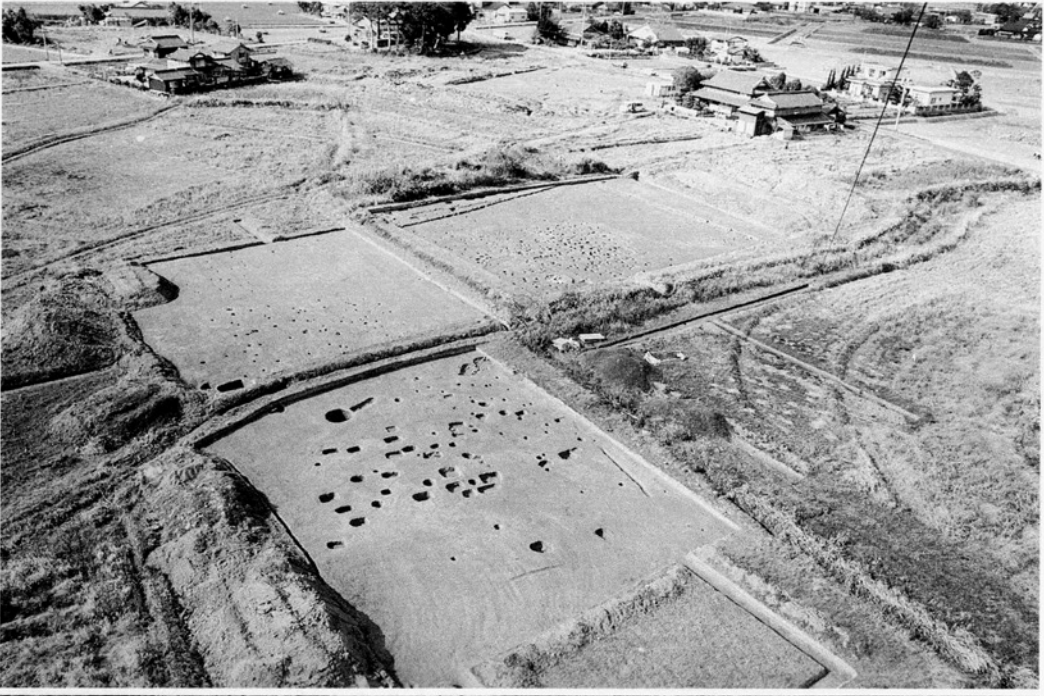
I	遺跡の位置と環境	1
II	調査の経緯	2
III	調査の概要	2
IV	遺 構	10
	1. 掘立柱建物	10
	2. 溝	15
	3. 井戸	16
	4. 土塙	17
	5. 墓	19
	6. 埋甕遺構	27
	7. 古墳周濠	27
V	遺 物	29
	1. 土器	29
	2. 土製品・石製品類	33
	3. 金属製品類	34
	4. 木製品類	35
	5. 玉類	35
VI	まとめ	36

## 図版目次

- |      |   |       |   |
|------|---|-------|---|
| 図版第1 | 上：調査地全景（東から）、下：Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ地区全景（北から）                           | 図版第9  | 上左：ST125（南から）、上右：ST101（東から）、下左：ST124（南から）、下右：ST103（南から）                             |
| 図版第2 | 上：Ⅰ地区全景（北から）、下：Ⅱ地区全景（北から）                               | 図版第10 | 上左：ST107（南から）、上右：ST109（東から）、中左：ST102（東から）、中右：ST115（南から）、下左：ST119（東から）、下右：ST126（北から） |
| 図版第3 | 上：Ⅲ地区全景（北から）、下：Ⅳ地区全景（西から）                               | 図版第11 | 上左：ST301（東から）、上右：ST302（東から）、下左：ST304（西から）、下右：ST302木棺内遺物出土状況                         |
| 図版第4 | 上：大日寺古墳およびⅤ地区遠景（東から）、下：Ⅵ地区全景（南から）                       | 図版第12 | 上左：ST307（南から）、上右：ST306（南から）、下：ST308・ST309（南から）                                      |
| 図版第5 | 上：Ⅴ地区全景（南から）、下：大日寺古墳周濠（南から）                             | 図版第13 | 出土土器  |
| 図版第6 | 上左：SE301（北から）、上右：SE101（西から）、下左：SK101（西から）、下右：SX101（西から） | 図版第14 | 出土土器（副葬品）   |
| 図版第7 | 上左：ST111（西から）、上右：ST116（東から）、下左：同上土器出土状況、下右：同上数珠玉出土状況    | 図版第15 | 鏡・銭・煙管・釘・櫛  |
| 図版第8 | 上左：ST118（東から）、上右：ST121（東から）、下左：ST110（東から）、下右：ST106（東から） | 図版第16 | 上：土製品・石製品類、下：数珠玉  |

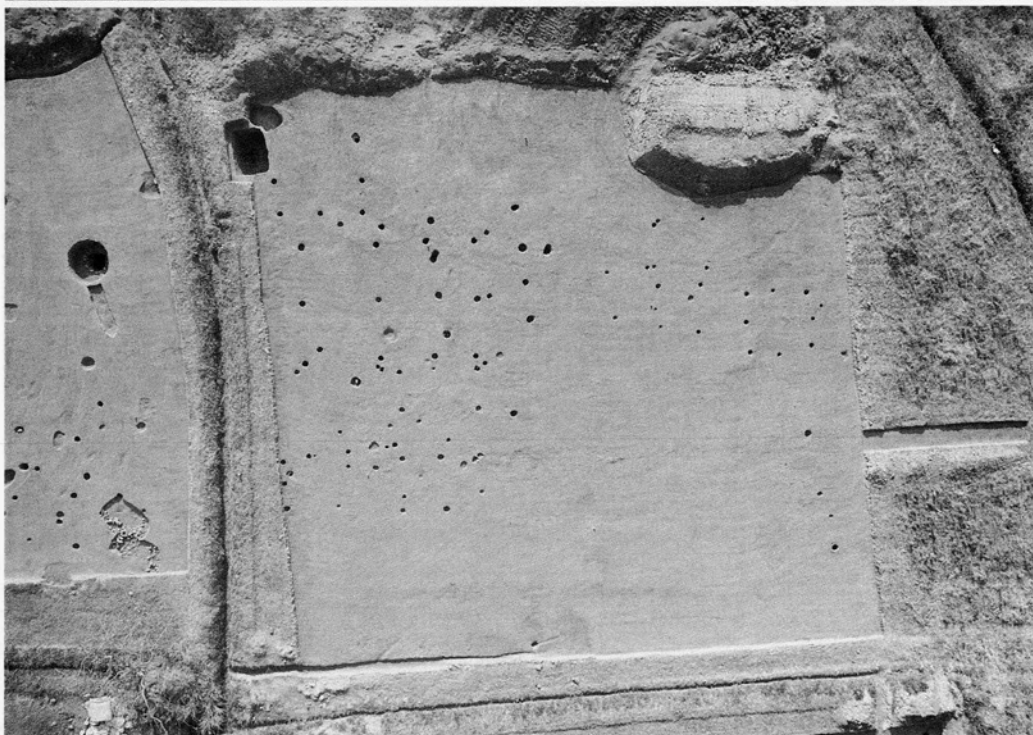
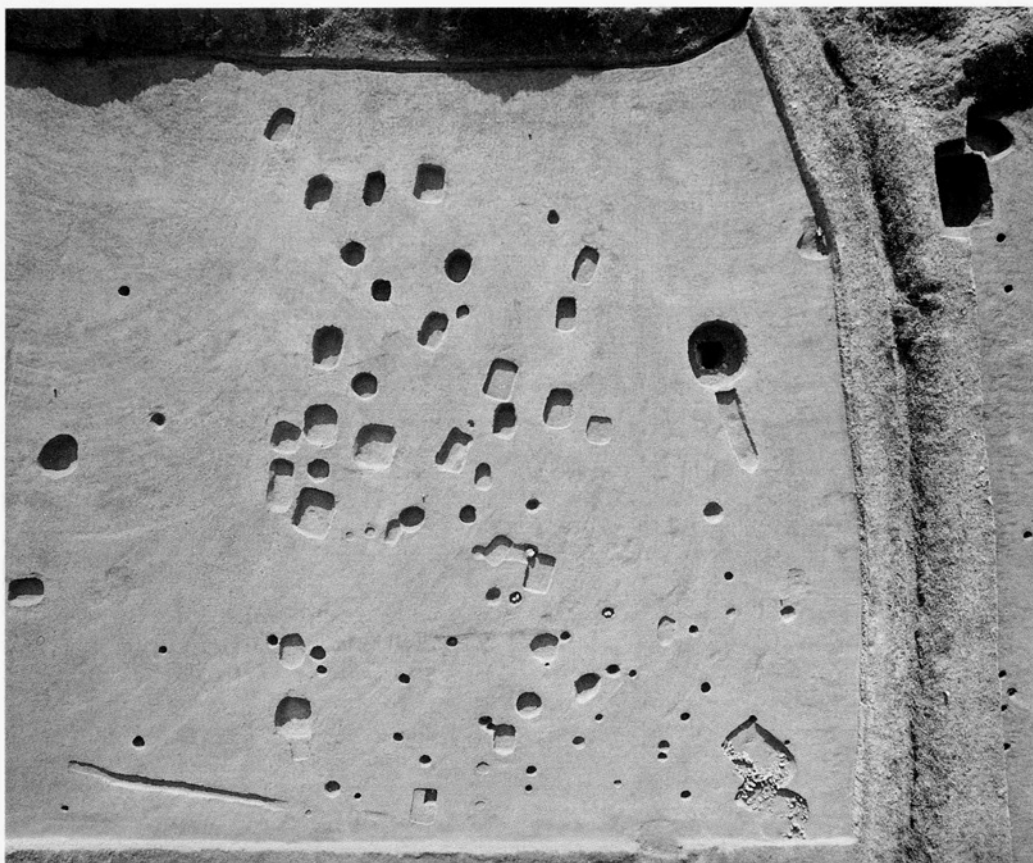
## 挿図目次

- |      |                      |      |                     |
|------|----------------------|------|---------------------|
| 第1図  | 遺跡の位置と周辺の遺跡……………1    | 第15図 | Ⅰ地区墓実測図(2)……………22   |
| 第2図  | 調査区設定図……………3         | 第16図 | Ⅰ地区墓・埋甕遺構実測図……………24 |
| 第3図  | Ⅰ地区遺構配置図……………4       | 第17図 | Ⅲ地区墓実測図……………26      |
| 第4図  | Ⅱ・Ⅲ地区遺構配置図…5～6（折込）   | 第18図 | 古墳周濠土層図……………27      |
| 第5図  | Ⅳ地区遺構配置図……………7～8（折込） | 第19図 | 大日寺古墳地形測量図……………28   |
| 第6図  | Ⅴ地区遺構配置図……………9       | 第20図 | 出土土器実測図(1)……………30   |
| 第7図  | Ⅵ地区遺構配置図……………10      | 第21図 | 出土土器実測図(2)……………31   |
| 第8図  | 掘立柱建物実測図(1)……………11   | 第22図 | 出土土器実測図(3)……………32   |
| 第9図  | 掘立柱建物実測図(2)……………12   | 第23図 | 石製品・土製品類実測図……………33  |
| 第10図 | 掘立柱建物実測図(3)……………14   | 第24図 | 鏡・銭拓影実測図……………34     |
| 第11図 | 井戸実測図(1)……………16      | 第25図 | 煙管・釘実測図……………34      |
| 第12図 | 井戸実測図(2)……………17      | 第26図 | 櫛実測図……………35         |
| 第13図 | 土壌実測図……………18         | 第27図 | 数珠玉実測図……………35       |
| 第14図 | Ⅰ地区墓実測図(1)……………20    |      |                     |



上：調査地全景（東から）

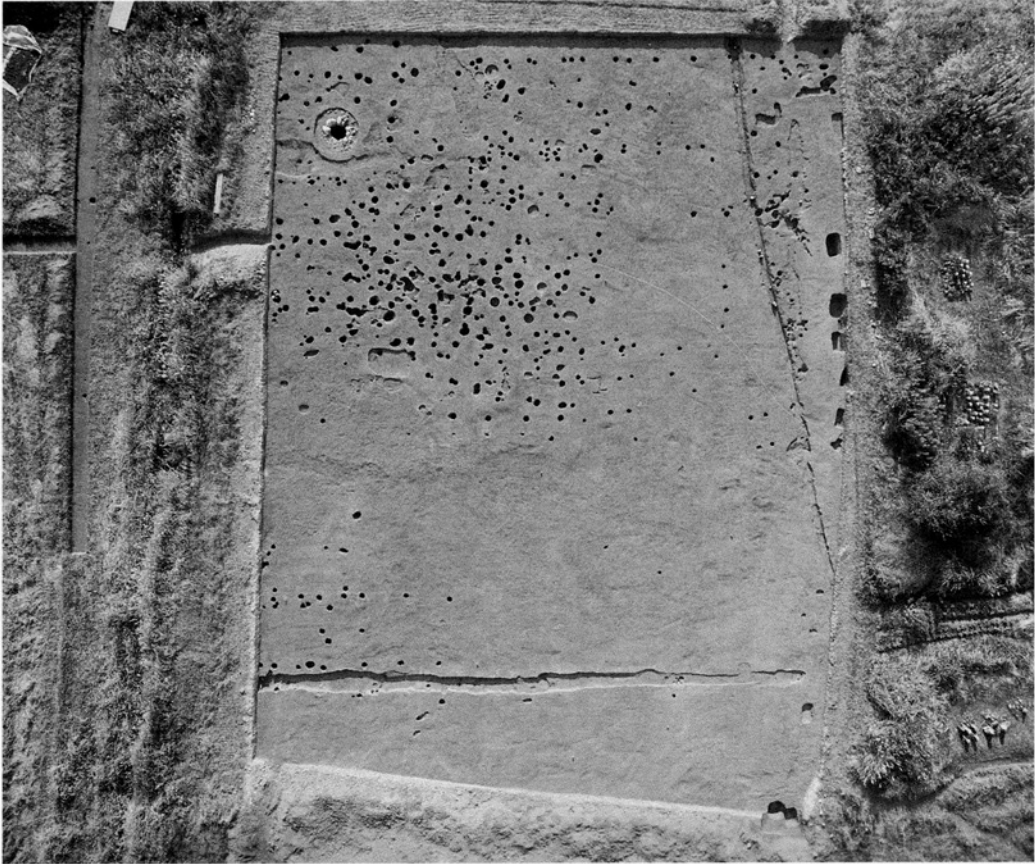
下：I・II・III地区全景（北から）



上：Ⅰ地区全景（北から）

下：Ⅱ地区全景（北から）

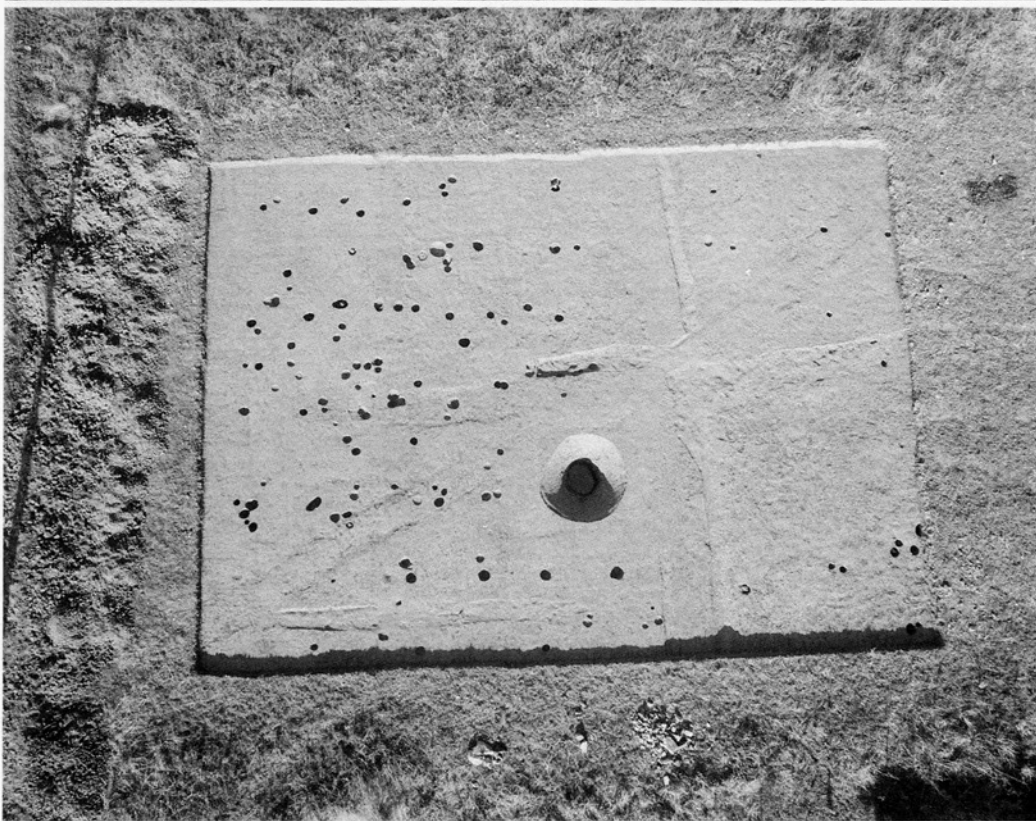




上：Ⅲ地区全景（北から）

下：Ⅳ地区全景（西から）

図版第 4



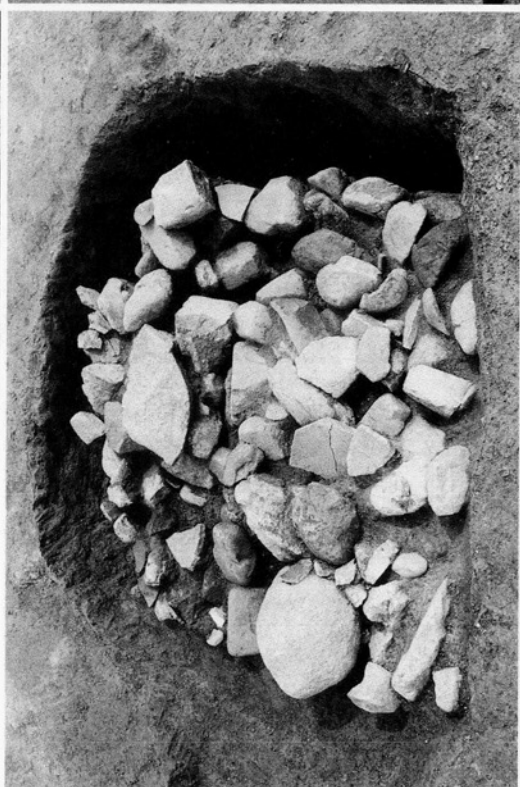
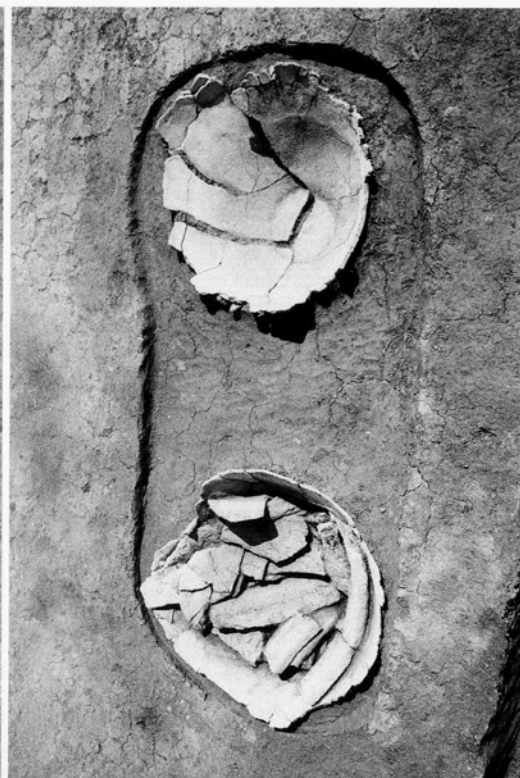
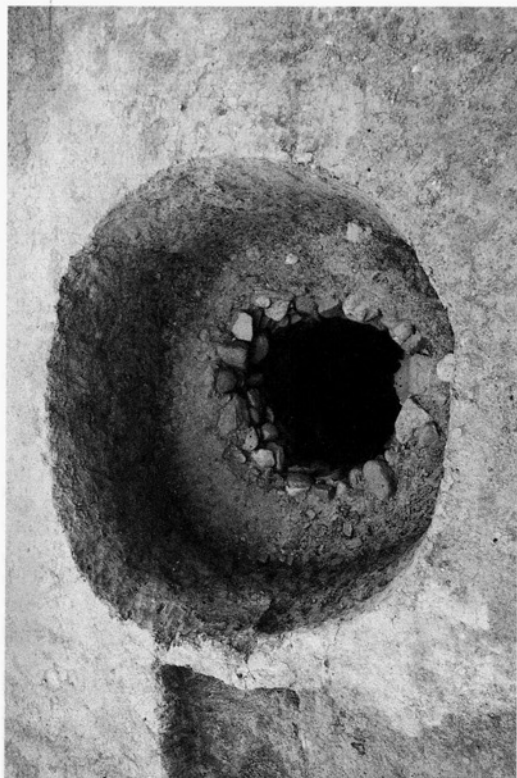
上：大日寺古墳およびⅤ地区遠景（東から）

下：Ⅵ地区全景（南から）

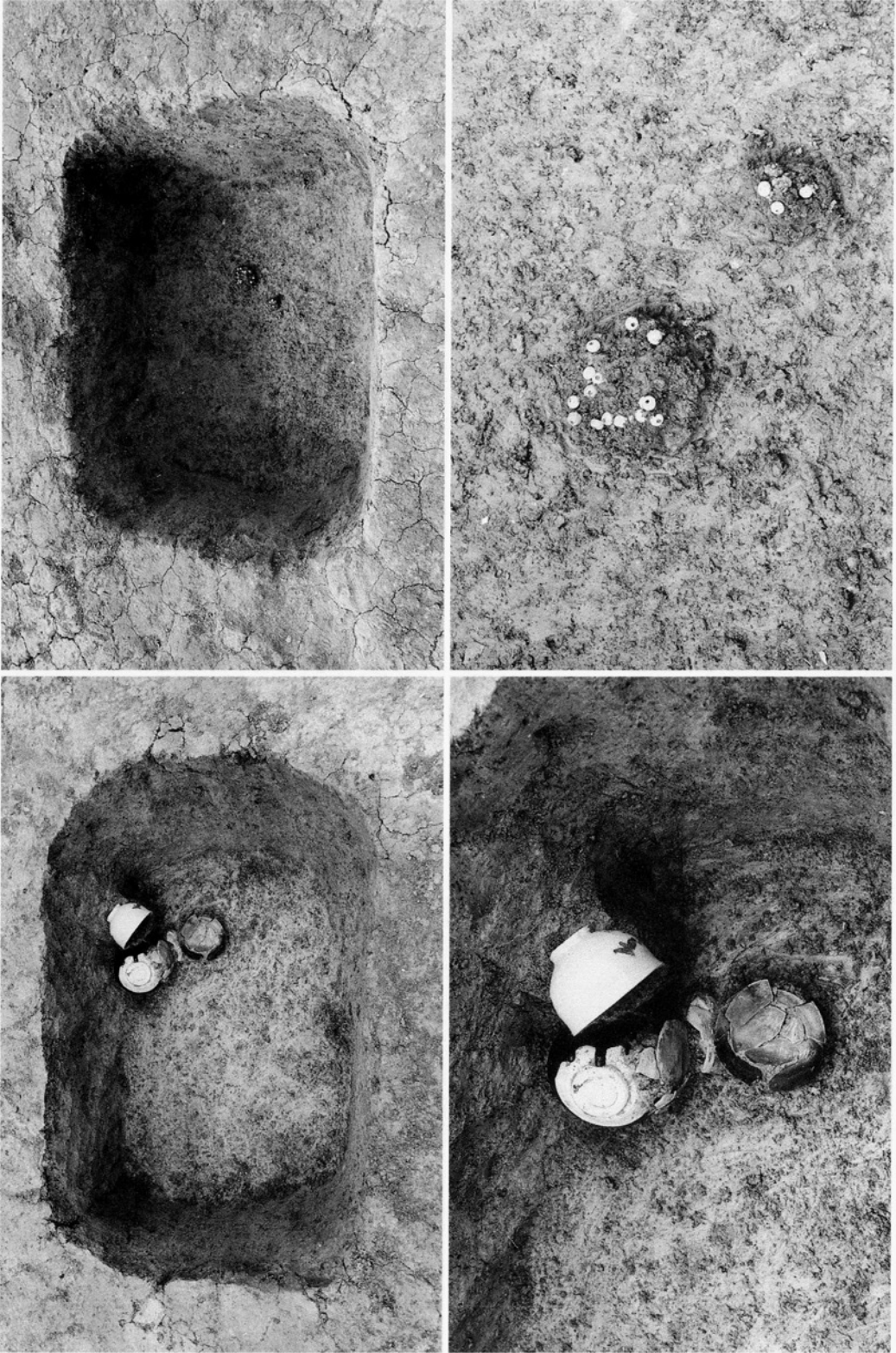


上：V地区全景（南から）

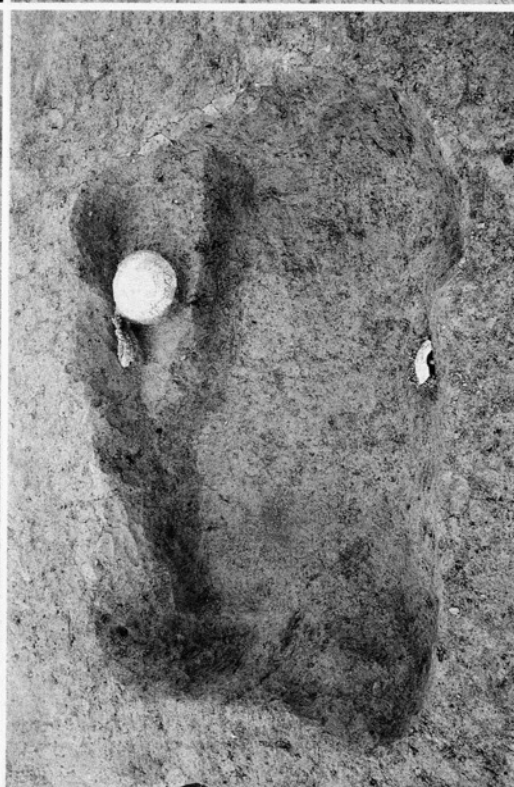
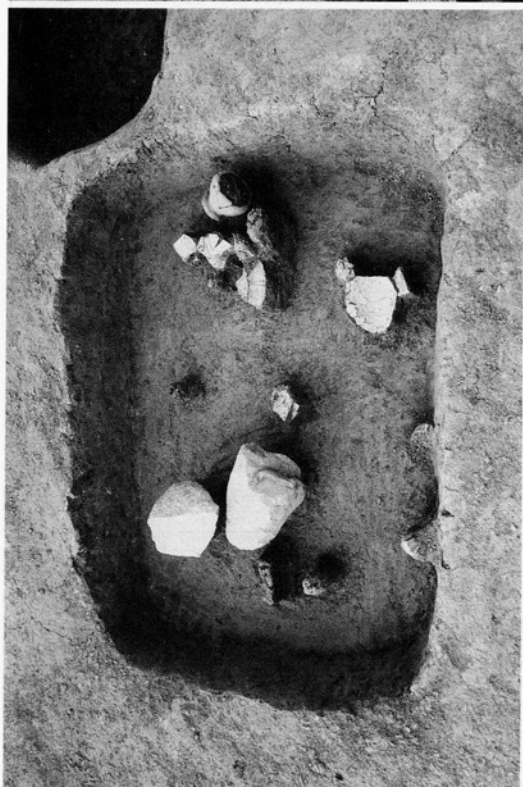
下：大日寺古墳周濠（南から）



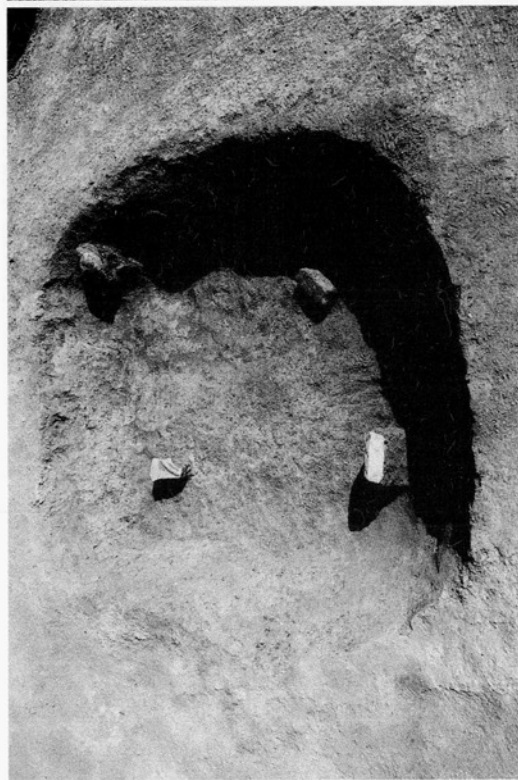
上左：SE301（北から）、上右：SE101（西から）  
下左：SK101（西から）、下右：SX101（西から）



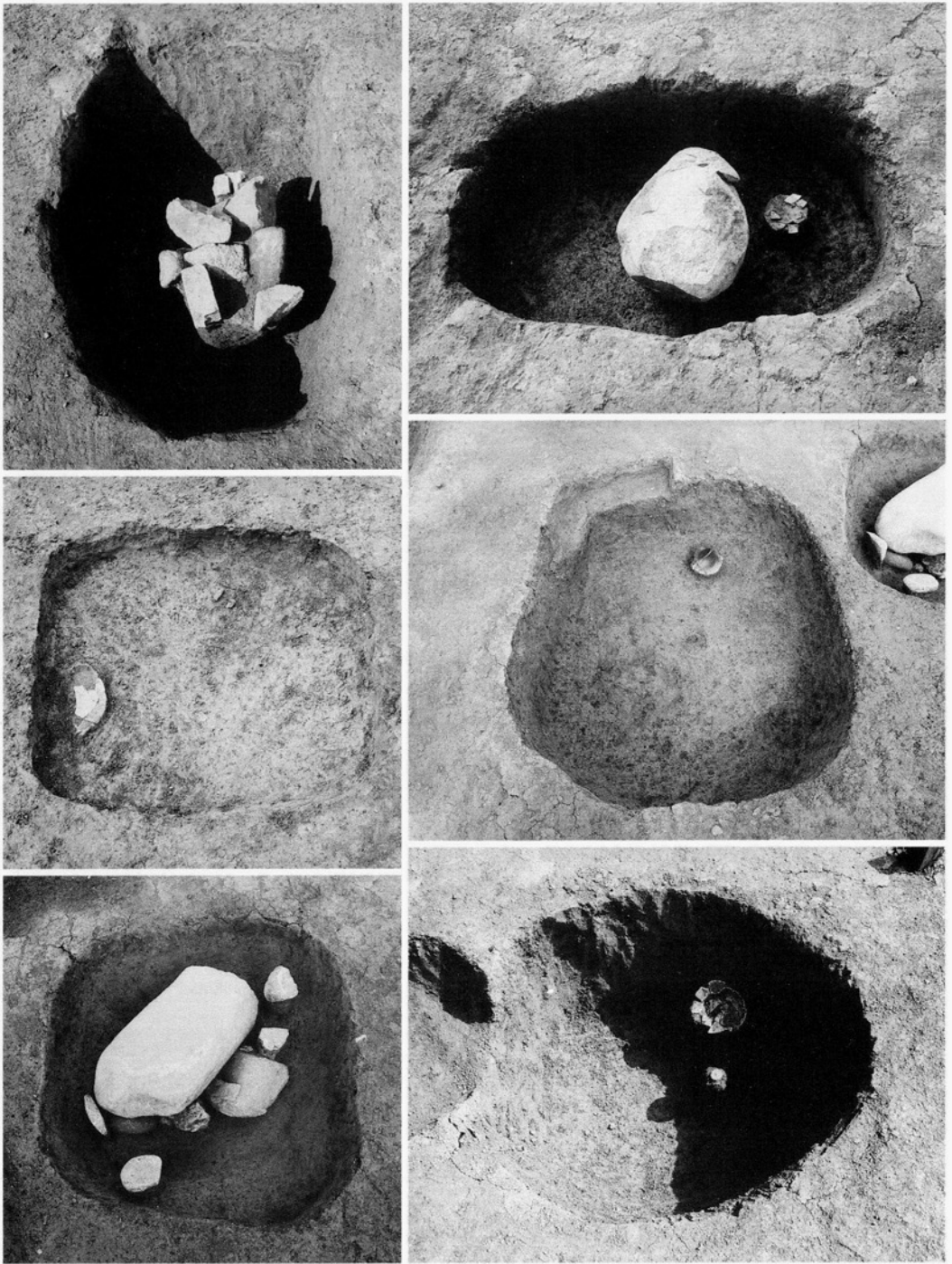
上左：ST111（西から）、上右：ST116（東から）  
下左：同上土器出土状況、下右：同上数珠玉出土状況



上左：ST118 (東から)、上右：ST121 (東から)  
下左：ST110 (東から)、下右：ST106 (東から)

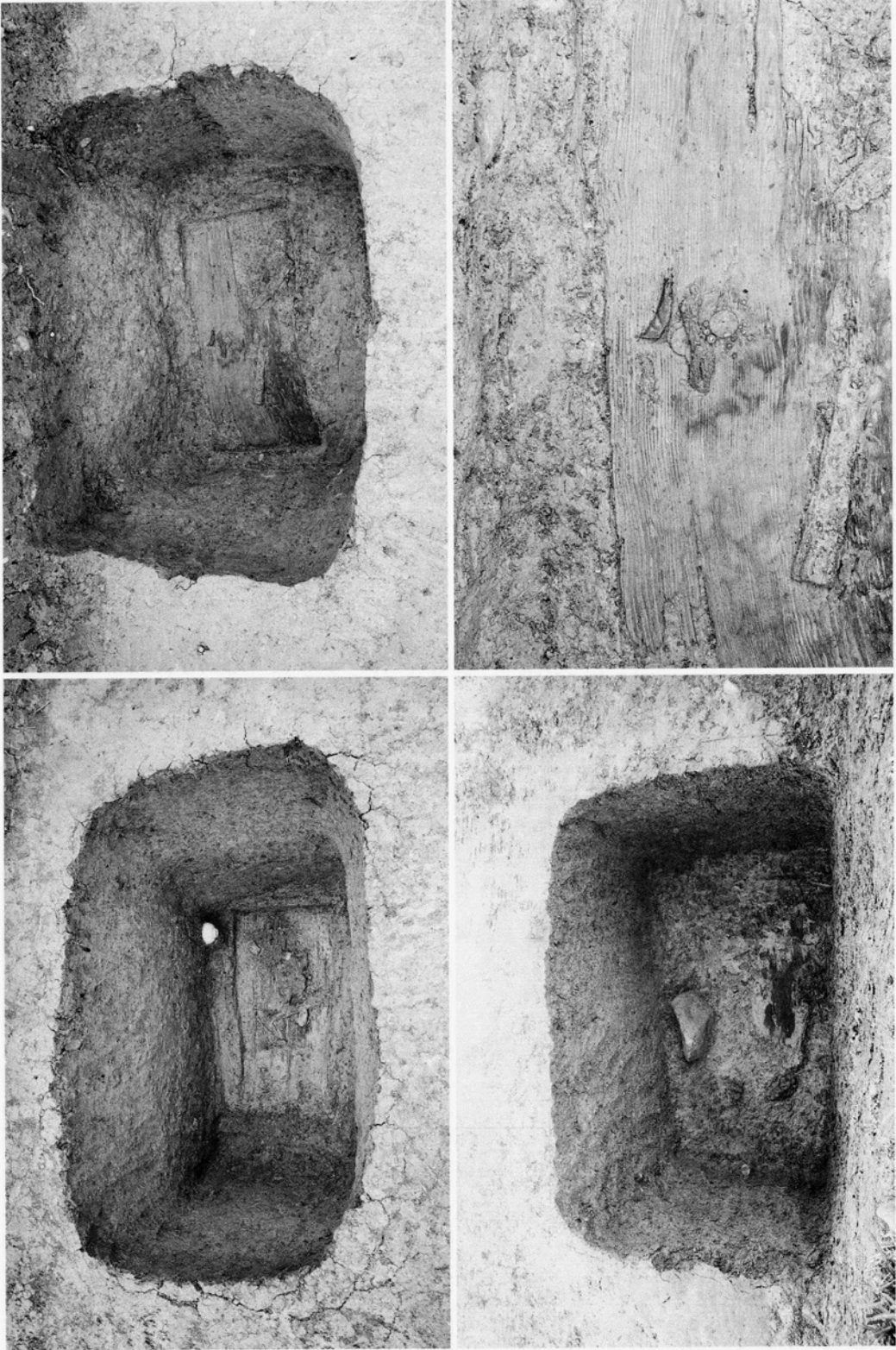


上左：ST125 (南から)、上右：ST101 (東から)  
下左：ST124 (南から)、下右：ST103 (南から)

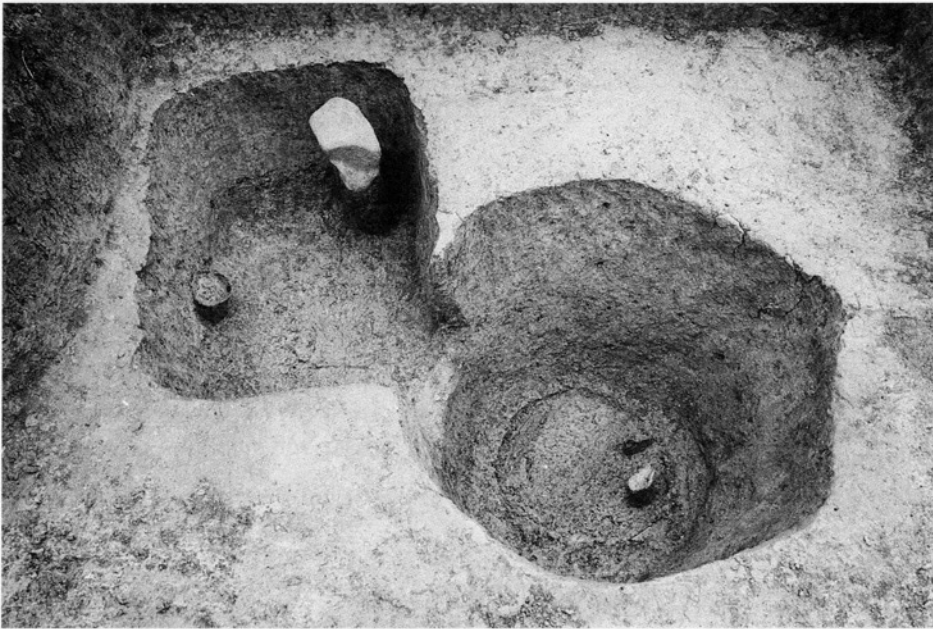
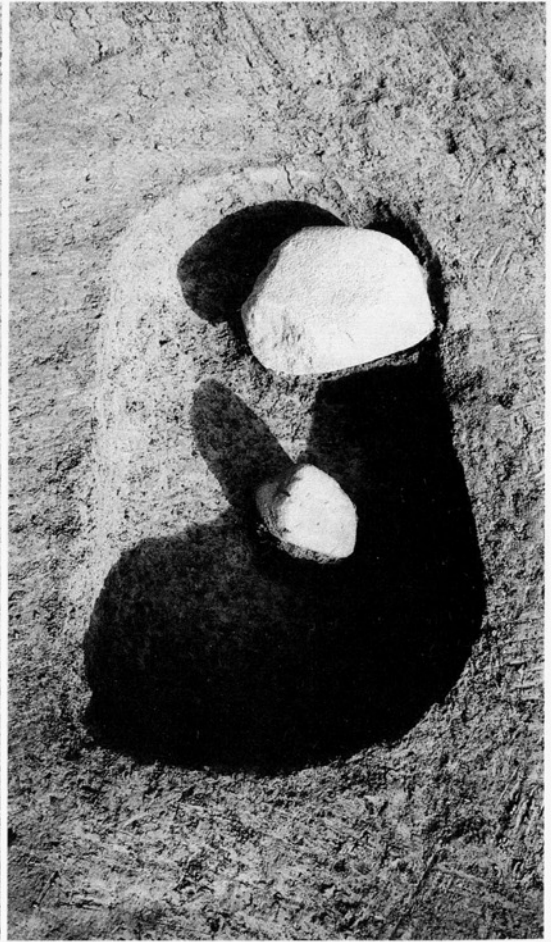


上左：ST107（南から）、上右：ST109（東から）  
中左：ST102（東から）、中右：ST115（南から）  
下左：ST119（東から）、下右：ST126（北から）





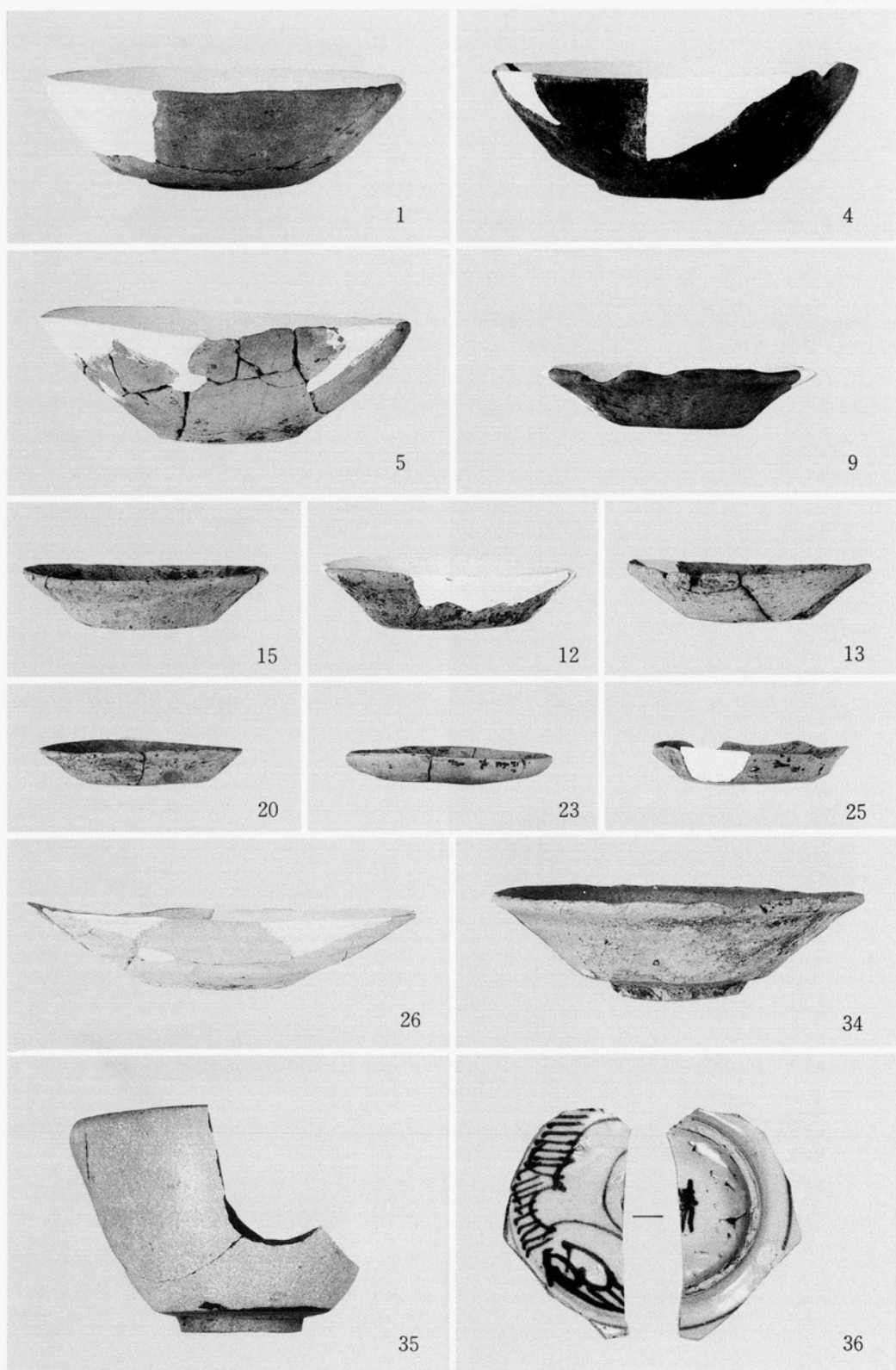
上左：ST301（東から）、上右：ST302（東から）  
下左：ST304（西から）、下右：ST302木棺内遺物出土状況



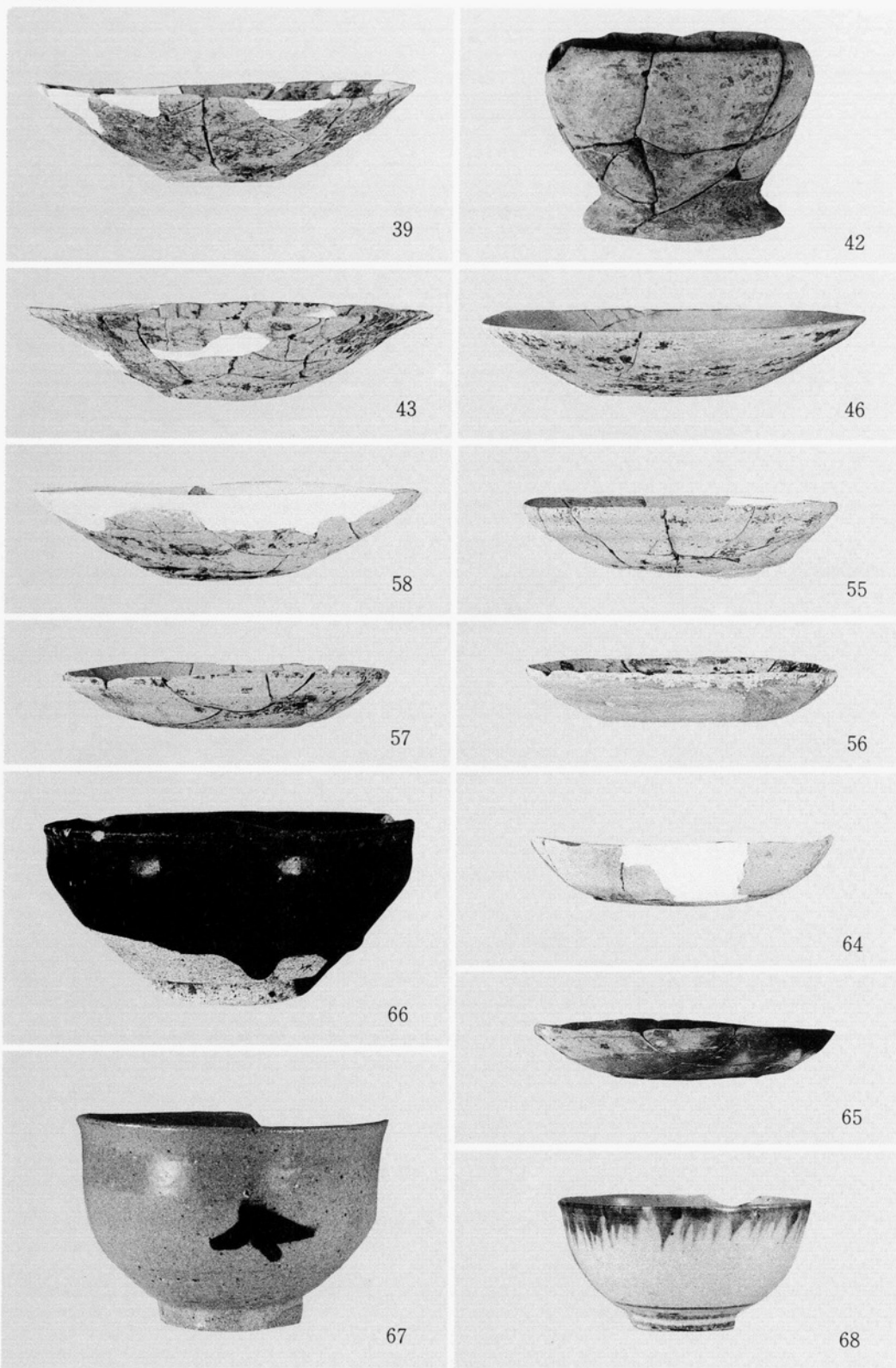
上左：ST307（南から）

上右：ST306（南から）

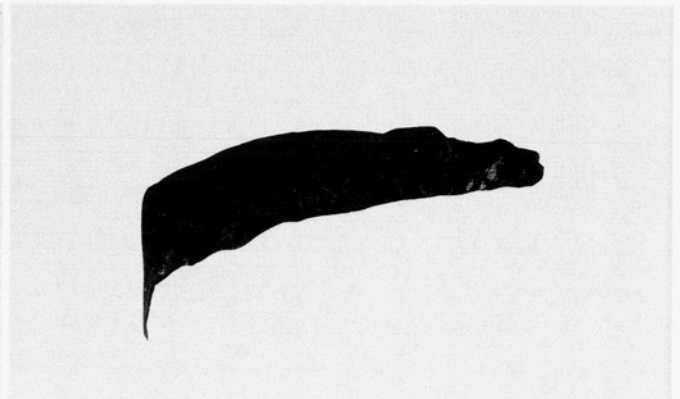
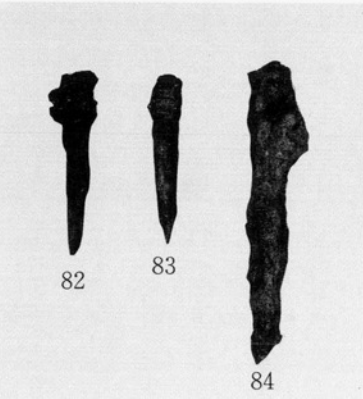
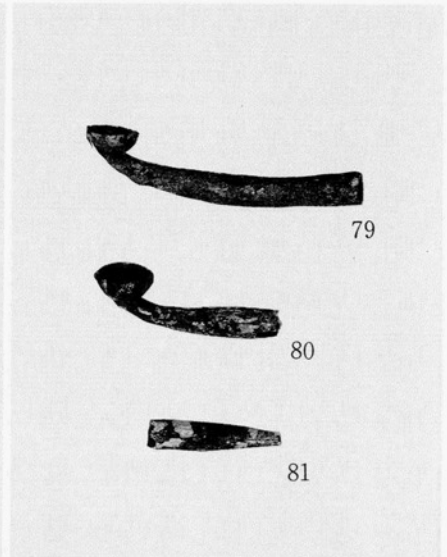
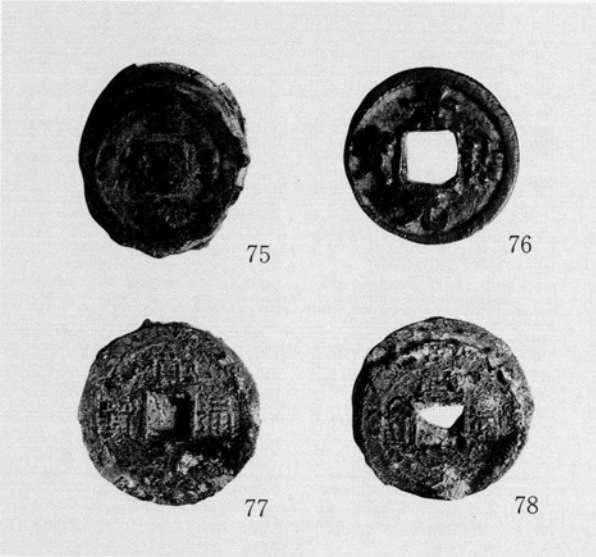
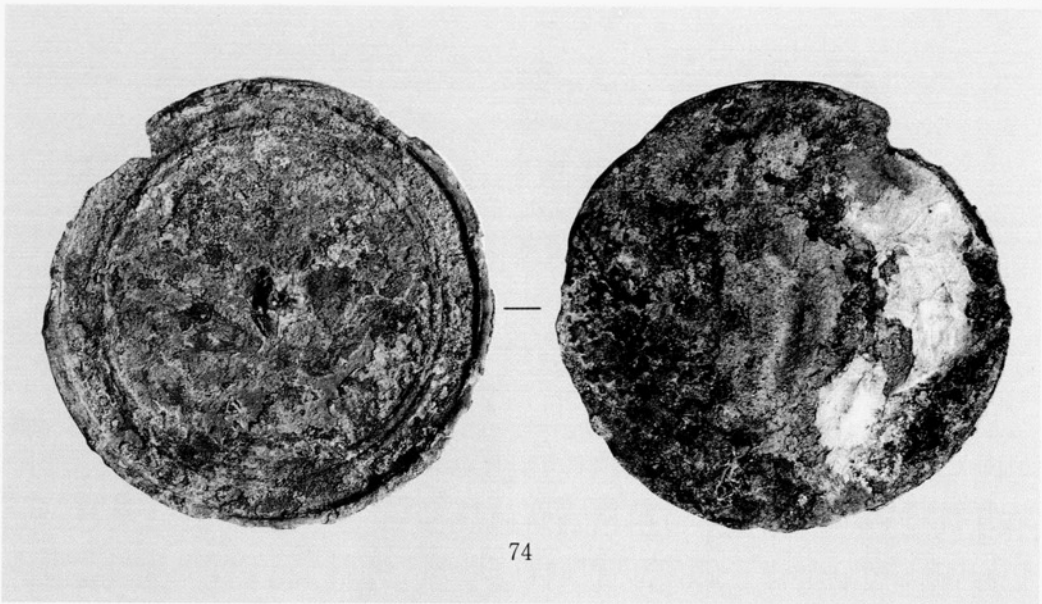
下：ST308・ST309（南から）



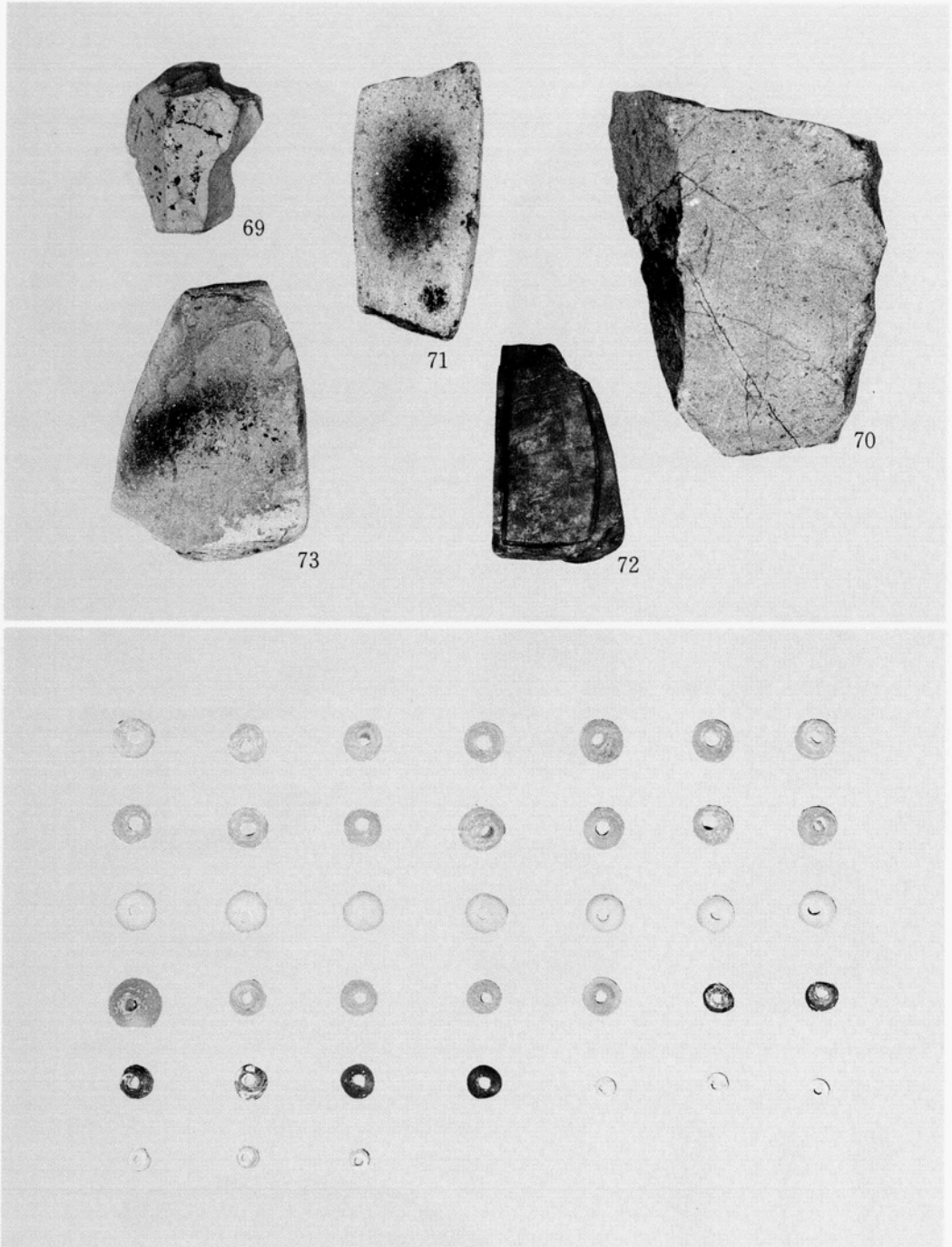
出土土器



出土土器 (副葬品)



鏡・錢・煙管・釘・櫛



上：土製品・石製品類  
下：数珠玉

# I 遺跡の位置と環境

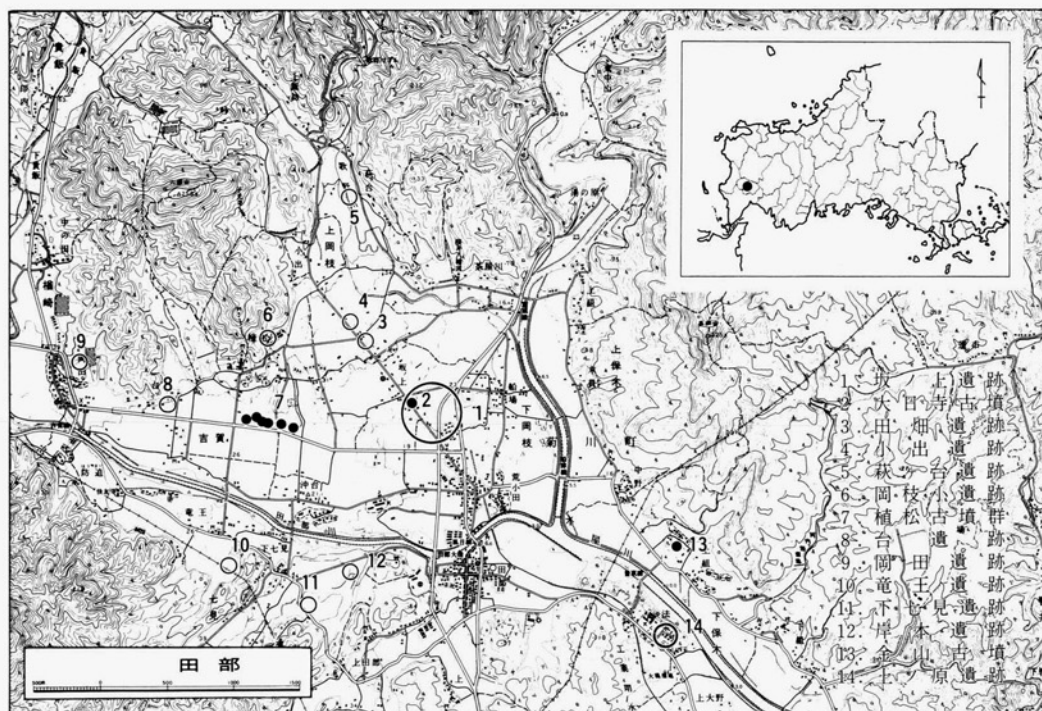
本遺跡は、豊浦郡菊川町大字上岡枝に所在する（第1図）。遺跡に冠した「坂ノ上<sup>さかのうえ</sup>」とは、付近一帯の行政区の呼称である。

菊川町は、山口県の南西部に位置し、中国自動車道小月インターチェンジから北へ車で5分、古くから小日本と言伝えられる豊かな内陸の小盆地である。中央部に広がる田部盆地は、その東縁を北から南へ木屋川が貫流し、南縁には西から支流の田部川が流れ下り木屋川に合流する。盆地の平坦地の大部分は、標高13～20mに広がる田部川の氾濫原と、北の岡枝（標高23～40m）、南の七見（同30m）という2つの扇状台地により形成される。遺跡の位置する坂ノ上地区は、盆地の北から木屋川に合流する歌野川が造り出した岡枝扇状台地の東南縁にあたり、標高約23～25m、周辺は水田地帯である。

田部盆地は、下関市から内日盆地を経由して県中央部へ向かう内陸交通の要衝として、古くから拓けてきた。中でも坂ノ上（昭和49年調査）・岸本・上ノ原などの弥生時代前期の遺跡は、響灘沿岸地帯に花開いた弥生土器文化の伝播ルートを探る、貴重な資料を提供している。

古墳時代に入ると、本調査区の北西隅に位置する大日寺古墳（箱式石棺）、さらにその西側に続く段丘端に残る植松古墳群（横穴式石室）などが知られているが、残念ながら、集落跡は未だ手掛かりが得られていない。

一方、近年の圃場整備事業の施行にともない、歴史時代の遺跡の調査が数を増してきた。地



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

下式横穴群の萩ヶ台遺跡、中世集落跡の小出・田畑遺跡など、主に盆地東北部にその確認が顕著である。

## Ⅱ 調査の経緯

坂ノ上遺跡は、菊川町田部盆地の北縁山麓から南へ派生する歌野川扇状地の南東端、大字上岡枝・下岡枝の坂ノ上といわれる小高い洪積台地一帯に所在する遺跡の総称である。従来から水田耕作や各種工事等に伴って各所で弥生土器片・石器や石棺などが発見され、その一部は船場遺跡・森ヶ台遺跡などと称されてきたが、その実態については明らかでなかった。

昭和49年、この台地のほぼ中央部を横断する形で県道バイパス建設工事が計画され、山口県教育委員会により事前に路線予定地内の発掘調査が実施された<sup>2)</sup>。その結果、弥生時代前期末を主体として室町時代にわたる複合集落遺跡であることが判明し、これを機に「坂ノ上遺跡」として遺跡名の統一がはかられた。

その後、県下では農業基盤整備事業が各地において進められ、田部盆地でも昭和56年度以降盆地北縁から順次圃場整備がなされるのに伴って、萩ヶ台遺跡<sup>3)</sup>・小出遺跡<sup>4)</sup>・田畑遺跡<sup>5)</sup>・台遺跡などの調査が行われてきた。

坂ノ上遺跡を含む地域における県営圃場整備事業の施工は昭和61年度から予定されることとなり、昭和60年度において施工予定地にあたる県道バイパス以北の広大な範囲について予察調査を実施した。この結果を踏まえて山口県教育委員会では山口県農林部耕地課と協議を行い、県道バイパス寄りの昭和49年度調査区の北側に連なる地区を中心として大日寺古墳周辺部を含む一帯について、昭和61年度に事前に発掘調査を実施することとなった。

調査は、財団法人山口県教育財団が山口県農林部から委託を受け、さらに山口県教育委員会が文化庁の国庫補助を受けて両機関が共同で行うこととなり、昭和61年8月25日から同年12月22日まで実施した。

## Ⅲ 調査の概要

今回の調査対象地は、坂ノ上台地の広大な範囲に及ぶことから、予察調査の所見や昭和49年調査の結果を踏まえ、調査の初めにトレンチ計26本を設定して遺構の広がりや分布密度等を把握し、大日寺古墳裾部を含めた計6地区について面的な発掘を行うこととした(第2図)。

調査地区は台地の南端近くに位置し、全体的に北から南へかけて緩やかに傾斜している。Ⅰ・Ⅲ地区の東側は深い谷筋となり、Ⅱ地区の西側からⅣ地区の南側にかけても浅い谷筋が入り込んでいる。台地上のⅢ地区北側からⅣ地区との間、およびⅣ地区とⅥ地区の間にかけても遺構は稀薄であり、Ⅰ～Ⅲ地区とⅣ地区は、遺構の広がりとしてはほぼ中心部に近い部分に当たるとみてよい。Ⅵ地区については、さらに西側へ遺構が広がっているものと予測される。

各地区とも基本的な層序は同一であり、1：耕土、2：床土、3：暗灰褐色粘質土、4：地





第2図 調査区設定図 (ローマ数字は地区名、算用数字はトレンチ番号を示す)

山（橙褐色粘質土）からなる。第3層の暗灰褐色粘質土層は、中世遺物の包含層であり、近世におけるこの地域一帯の水田開発によって地山とともに削平を受け、部分的に残存していた。各地区とも遺構は、水田の暗渠を除いてほとんどが地山面において検出されたものである。遺構埋土は、1：赤褐色粘質土、2：暗灰褐色～暗褐色粘質土、3：灰色粘質土の大別3種類が認められ、2のものが大半を占めている。2は中世、3は近世ないしそれ以降、1は中世以前と推定される。

調査はI地区から始め、順次VI地区へと展開した。I地区（第3図）では、中世末～近世初



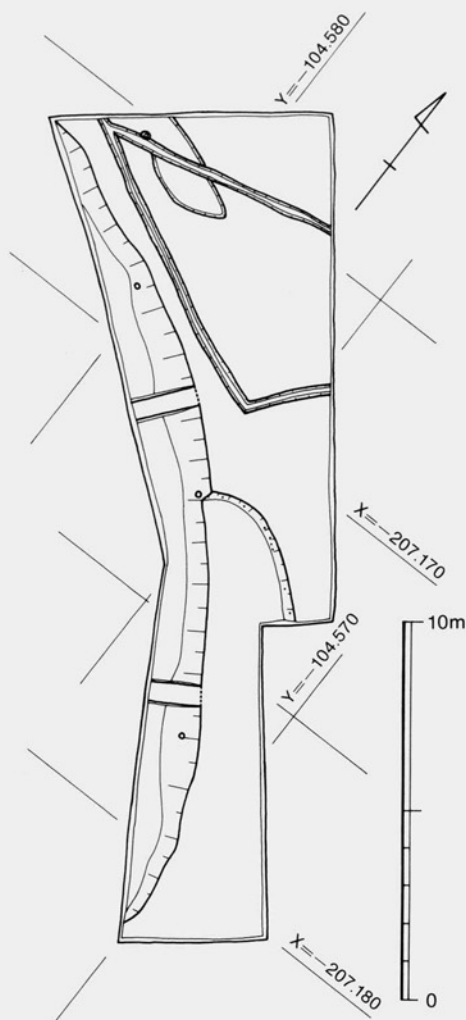
第3図 I地区遺構配置図



第4図 II・III地区遺構配置図



第5图 IV地区遺構配置図



第6図 V地区遺構配置図

建物群・井戸・土壌は大半が調査区の南東部に集中しており、北と西側にこれらを囲郭する溝が巡っている。建物群はさらに東側へ若干広がっているものとみられるが、東方に谷筋が入り込んでいるためその広がりにはさほど大きなものではないとみられる。埋葬遺構は、調査区の西端沿いに南北に連なって検出された。西側に接して江戸時代後半以降の寄せ墓が現在まで残されており、これらに先行する墓地の一画であった状況をうかがうことができる。

Ⅳ地区（第5図）では、中世の掘立柱建物3棟を含む多数の柱穴、溝3条などを検出した。これらの遺構群は、最初のトレンチ調査や微地形の状況などからみて、東・西・南の三方にはあまり広がりをもたないものと推定され、若干北側へ連なる可能性がある。

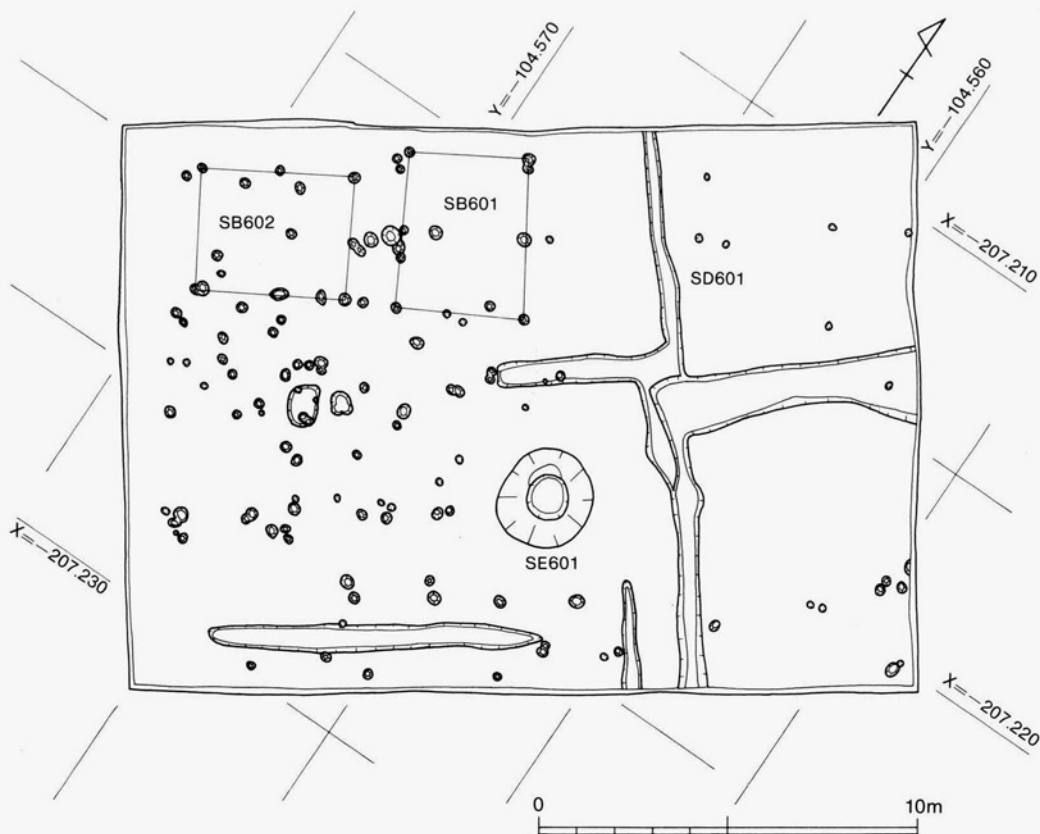
V地区（第6図）では、大日寺古墳の周濠の一部を検出した。墳丘部については、今回圃場整備の対象からは除外されて現状保存されることから、地形測量を行うにとどめた。

Ⅵ地区（第7図）では、中世～近世の掘立柱建物2棟を含む柱穴群、井戸1基、溝などを検出した。地山面は、調査区の東側に向けてやや低く傾斜しており、Ⅳ地区の南方に入り込んで

頭の埋葬遺構33基、埋竈遺構1基、近世以前の井戸1基、近世の土壌3基のほか、柱穴とみられる小ピット群などを検出した。埋葬遺構は、南北20m、東西10mの範囲にまとまって分布しており、1つの墓地として機能していたとみられる。なお、このⅠ地区は昭和49年調査区の北側に接する場所に当たっているが、今回、弥生時代の遺構は全く検出されなかった。このことからみて、弥生時代の遺構の広がり、南側の県道バイパス辺りを北限とし、これより南へ展開しているものと推定されよう。

Ⅱ地区（第4図）では、中世の掘立柱建物5棟を含む柱穴群、近世の土壌1基を確認した。調査区の北寄りには遺構が認められないが、Ⅲ地区との間に畦畔が走って上下2枚の水田に分かれていることから、水田開発時に北側の高い部分が削平された結果によるものとみられる。ただしⅡ地区の建物群が、Ⅲ地区の建物群と一連のものであるかどうかについては検討を要す。

Ⅲ地区（第4図）では、中世の掘立柱建物8棟を含む柱穴多数、溝5条、井戸1基、土壌2基、近世を主体とする埋葬遺構9基などを検出した。



第7図 VI地区遺構配置図

いる谷筋へ続くものとみられる。検出された遺構群は、さらに西へ広がりをもつ遺構群の東端にあたるものと推定される。

## IV 遺 構

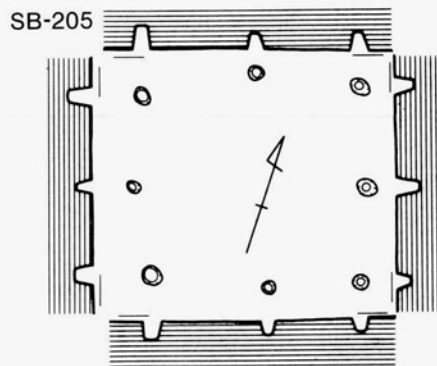
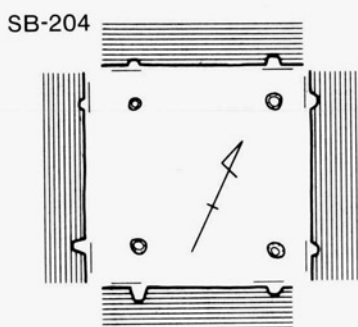
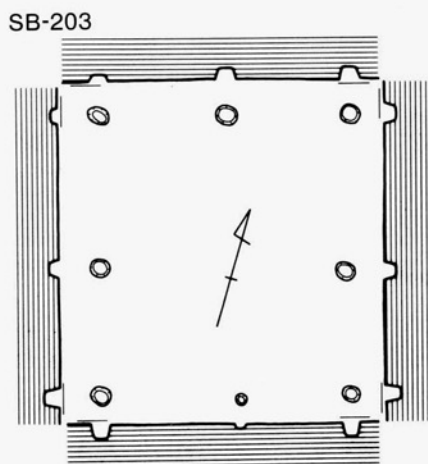
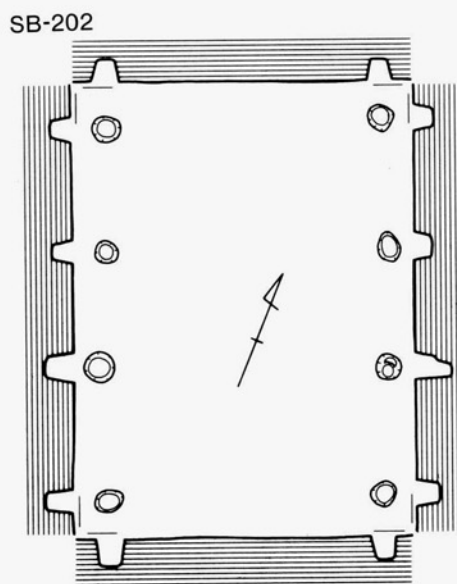
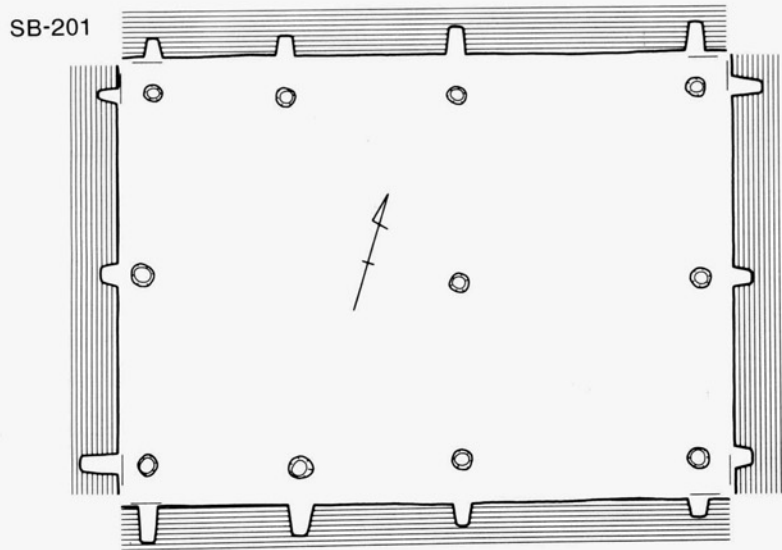
今回の調査で各地区から検出された遺構には、掘立柱建物18棟、柱穴多数、溝9条、井戸3基、土壙6基、埋葬遺構42基、埋甕遺構1基および古墳周濠などがある。これらの遺構群は、古墳周濠を除いて室町時代後半～江戸時代前半に属するものが大半を占めている。

### 1. 掘立柱建物 (第8～10図)

各調査区からは、疎密の差はありながらも、多数の柱穴とみられる小ピットが検出された。これらは、その多くが本来掘立柱の建物を構成していたものとみられるが、その数に比して明確に建物として復元し得る例は少ない。以下、これらの建物について概要を記す。

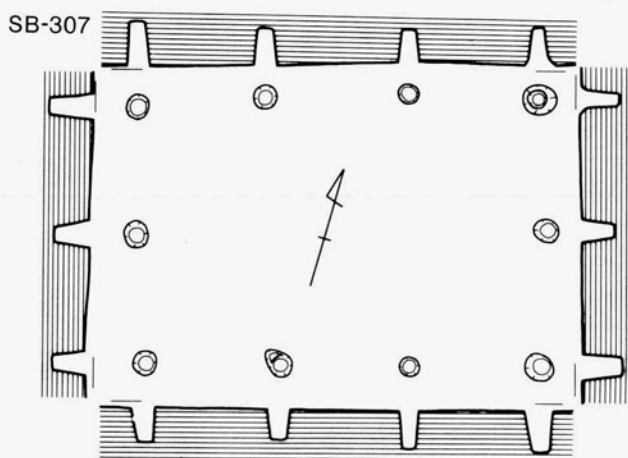
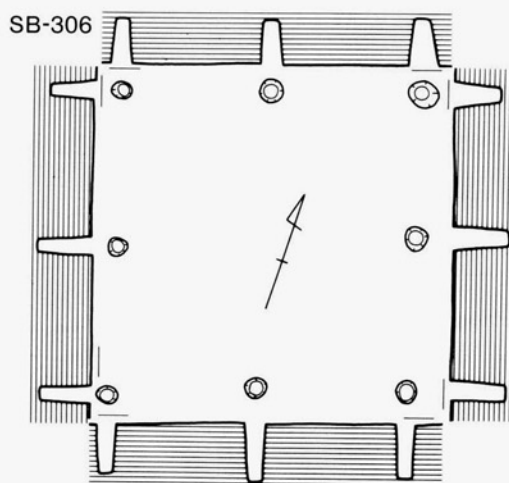
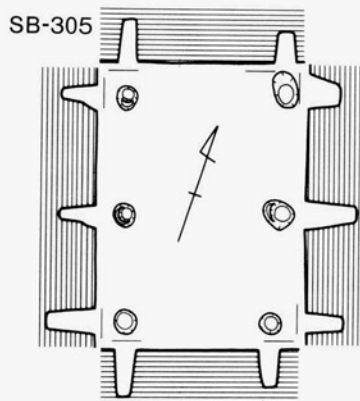
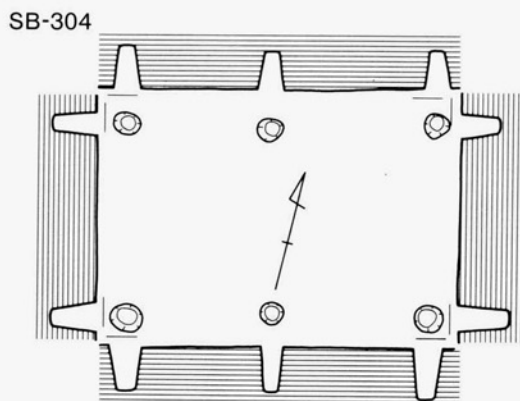
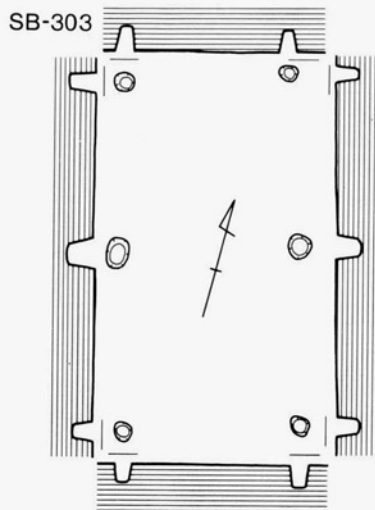
**SB-201** II地区南東部に位置し棟方向を東西方向にもつ身舎3間×2間の建物である。桁行長7.3m、梁行長4.9mを測る。柱間距離は桁方向が2.0m～3.1m、梁方向が平均2.45m。

**SB-202** SB-201と北東部が重複し、棟方向はほぼ直交して南北である。身舎3間×1間、桁行長4.9m、梁行長3.65mを測る。柱間距離は桁方向で平均約1.6m、梁方向は1間分として



0 5m

第8图 掘立柱建物实测图(1) H=21.50m



第9図 掘立柱建物実測図(2) H=22.00m



は3.65mとやや広めである。

**SB-203** SB-201の北側0.5mに棟方向を直交させて隣接する。身舎2間×2間、桁行長3.7m、梁行長3.3m。柱間距離は桁方向で1.7m・2.0m、梁方向で1.5m・1.8mを測る。

**SB-204** SB-202の西側7mにほぼ平行して位置し、身舎1間×1間で平面形は方形をなす。柱間距離は平均1.85m。

**SB-205** SB-204の西側8.5mに平行して位置する。身舎2間×2間、桁行長2.8m、梁行長2.6mを測り、平面形はほぼ方形をなす。柱間距離は桁方向で平均1.4m、梁方向で平均1.3m。

**SB-301** Ⅲ地区の南東隅に位置する建物でSB-302と重複する。南側と東側が調査区外のため、建物としての形態・規模は不明であるが、南北方向に1間分、柱間距離1.3m、東西方向に2間分、柱間距離各1.5mを検出した。

**SB-302** SB-301と重複し、同じく南側と東側が調査区外であるが、南北方向に2間分、柱間距離の平均1.5m、東西方向に3間分、柱間距離の平均1.8mを検出した。

**SB-303** Ⅲ地区の南端やや西寄りに位置し、棟方向を南北方向にもつ身舎2間×1間の建物である。桁行長4.6m、梁行長2.3m、柱間距離は桁方向・梁方向とも平均2.3mを測る。

**SB-304** Ⅲ地区の中央部やや東南寄りに位置する建物である。棟方向は東西で、SB-305と直交する。身舎2間×1間。桁行長4.1m、梁行長2.5m、柱間距離は桁方向で2.0m・2.1m。

**SB-305** SB-304の西側0.8mに棟方向を直交させて隣接する建物である。身舎2間×1間。桁行長3.0m、梁行長2.0m、柱間距離は桁方向で平均1.5mを測る。

**SB-306** SB-305の南西約3mに位置し、身舎2間×2間の建物である。平面形は方形で柱間距離の平均2.0mを測る。

**SB-307** SB-304の北西約7mに棟方向を東西にもつ、身舎3間×2間の建物である。桁行長5.3m、梁行長3.5m、柱間距離は桁方向で各1.8m、梁方向で1.75mを測る。

**SB-308** Ⅲ地区の北東隅に位置し、東側が調査区外で未検出だが、西に廂を持ち棟方向を東西方向に取る建物と推定。桁行は柱間距離2.4m、廂の出2.1m。梁行は2間で梁行長3.5m、柱間距離は1.7mと1.8mを測る。

**SB-401** Ⅳ地区の南側、棟方向を北西から南東方向にとる身舎3間×2間の総柱式の建物である。桁行長5.55m、梁行長3.3m。柱間距離は桁方向で1.5m～2.3m、梁方向は平均1.7m。

**SB-402** SB-401の北東4mに棟方向をほぼ平行させて位置する、身舎2間×2間の建物である。桁行長4.7m、梁行長2.65mを測り、柱間距離は桁方向2.0m～2.6mと不揃い、梁方向は平均1.3m。

**SB-403** SB-402の北西14mに位置し、棟方向はSB-401・402とほぼ同じ。身舎2間×2間の総柱式の建物である。北側と西側に廂をもち、身舎の桁行長は5.5m、廂を含めると7.0m、梁行長は4.7m、廂を含めると5.5mを測る。柱間距離は桁方向が2.6m～2.9m、梁方向が2.3m・2.4m。



SB-601 VI地区の中央北隅に位置し、IV地区の建物群と棟方向を同方向にとる。桁方向2間（柱間距離各2.1m）、梁方向は南側2間（柱間距離1.4m・2.1m）、北側1間（同3.2m）と不規則な7本柱の建物である。

SB-602 SB-601の西側2.5mに棟方向を直交させて隣接し、規模・形態も同じ建物。桁方向2間（柱間距離1.85m～2.0m）、梁方向は東側2間（柱間距離1.8m・1.5m）、西側は1間（3.2m）の7本柱である。

## 2. 溝（第4・5・7図）

SD-301 III地区の西端に位置し、ほぼ北から南へSD-302と平行して走る。複雑に入り組んだ形をしており、長さ14m、幅25～170cm、深さはおよそ5～10cmを測る。遺物は、瓦質の鍋と土師器片が出土した。時期は室町時代後半に比定される。

SD-302 SD-301と平行して走る溝である。北側と南側が調査区外で未掘であるが、確認した範囲では長さ28m、幅35～60cm、深さは8～30cmを測る。遺物は、室町時代後半に比定される瓦質の鍋（第21図27）や土師器片などが出土した。同じくIII地区で検出した建物群との位置及び遺物の時期から、建物群をとりまく溝と推定される。

SD-303 III地区の北端を、SD-302と直交してほぼ西から東へ走る溝である。東側が調査区外のため未確認であるが、検出した範囲内での長さは27m、幅は48～110cm、深さは5～40cmを測る。遺物は、瓦質の播鉢と土師器片が出土した。時期はSD-302と同時期に比定され、同じく建物群の北側を画する溝であると推定される。

SD-304 III地区の南東隅、SE-301の北側を西から東に走る溝である。東側が調査区外であるが、確認した範囲では長さ10.6m、幅40cm～195cm、深さ5cm～20cmを測る。遺物は、室町時代後半に比定される土師器皿（第20図21）が出土した。位置関係及び遺物の時期から、後述するSD-305と同じく、SE-301と関連がある可能性が高い。

SD-305 III地区の南端を、SD-304と直交して北から南へ走る溝である。南側が調査区外で未掘であるが、検出した範囲では長さ5.6m、幅95～150cm、深さ5cmを測る。遺物は、室町時代後半に比定される土師器片と瓦質の鍋が出土した。遺構面が若干削平を受けているため不明確ではあるが、本来SD-304と繋がっていた可能性が高く、SE-301と関連をもつことが推定される。

SD-401 IV地区の南側を、建物群の棟方向と直交して北東から南西に走る溝である。西側が調査区外で未掘であるが、確認した範囲内では長さ21m、幅35～110cmを測る。深さは5～10cmと浅く、遺物は出土していない。

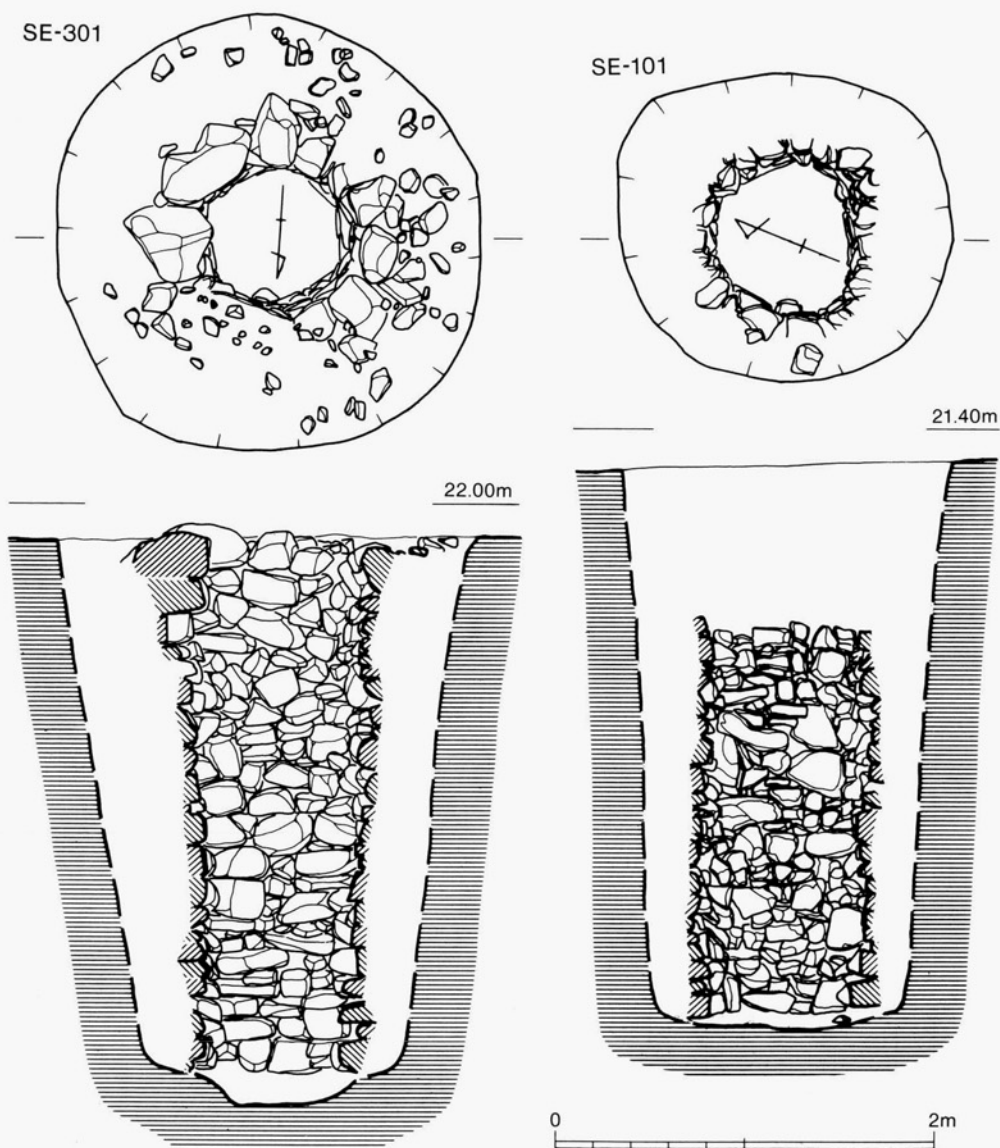
SD-402 IV地区の南東隅、SB-401の東側を建物の棟方向に平行して北西から南東に走る溝である。長さ5.5m、幅65cm、深さ8～20cmを測り、遺物は、室町時代に比定される土師器片と瓦質土器片が出土した。位置関係から、後述するSD-403と同じくSB-401に伴う溝であると推定される。

SD-403 IV地区の南端、SB-401の南側をSD-402と直交して走る溝である。長さ3.5m、幅64cm、深さ5～10cmを測る。遺物は出土していないが、SB-401に伴う溝と思われる。

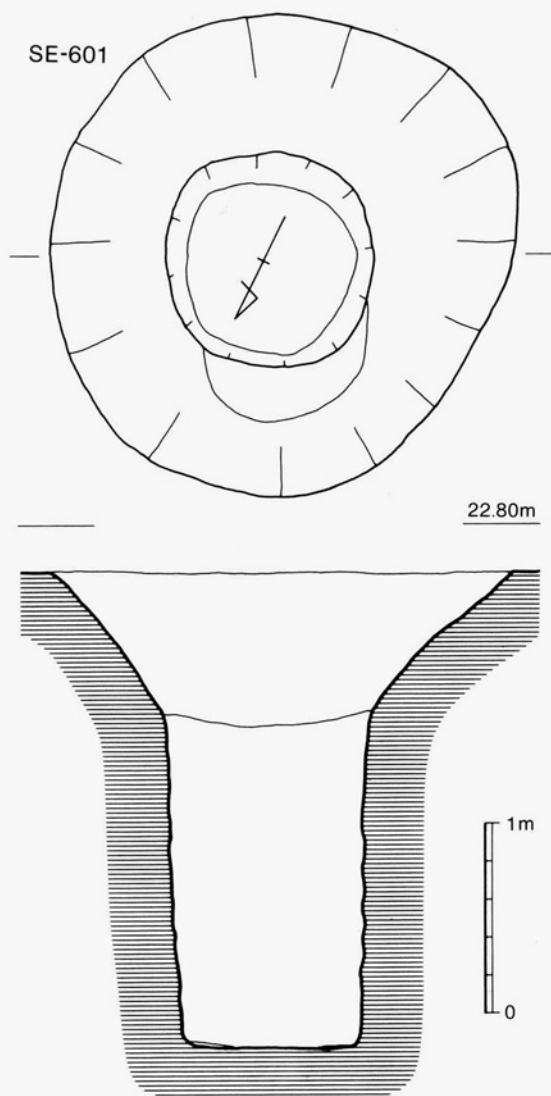
SD-601 VI地区の東側を、建物群と平行して北西から南東に走る溝である。南北両側とも調査区外であるが、確認した範囲では幅45～120cm、深さ5～10cmを測る。埋土中から瓦質の鍋・播鉢・土師器片・陶器片など室町時代～江戸時代にかけての遺物が出土した。位置関係と遺物の時期から、SB-601・602の建物群などと関連をもつ可能性もある。

### 3. 井戸

SE-301 (第11図) III地区の南東隅に位置する。径2.25～2.35mの円形の掘り方をもつ石組の井戸で、深さ約3m。石組の上端内径約75cm、下端内径65～70cmを測る。長径30cm前後の比較的大きな石を用いて、ほぼ垂直に整然と積み上げられている。井戸内埋土中から、曲物・



第11図 井戸実測図(1)



第12図 井戸実測図(2)

桶などの一部が出土し、掘り方埋土から土師器片が検出された。室町時代に属するものと推定される。

SE-101 (第11図) I地区西側に位置する。径1.85~1.6mの不整な円形の掘り方をもつ石組の井戸で、深さ2.95m。掘り方上面から85cmの深さまでは、すでに石組が取り除かれていた。残存する石組の上端内径は約80cm、下端内径約70cmを測る。10~40cm位の大小の石を用いており、石の積み方は極めて粗雑である。井戸内底部近くから土師器片や染付片が出土しており、廃絶時期は江戸時代前半頃と推定される。

SE-601 (第12図) VI地区の中央に位置する。径2.6~2.35mの不整な円形を呈する素掘りの井戸で、深さ2.5m。上面から70cmの深さまではラッパ状に掘り込まれ、この部位から底面までは円筒状に掘り下げている。屈曲部の径1.1m、底径0.9mを測る。埋土中からは、土師器皿・瓦質鍋・瓦質播鉢・染付・瓦片などのほか、曲物・桶の一部・煙管・松笠などが検出され、さらに底面から鹿の角

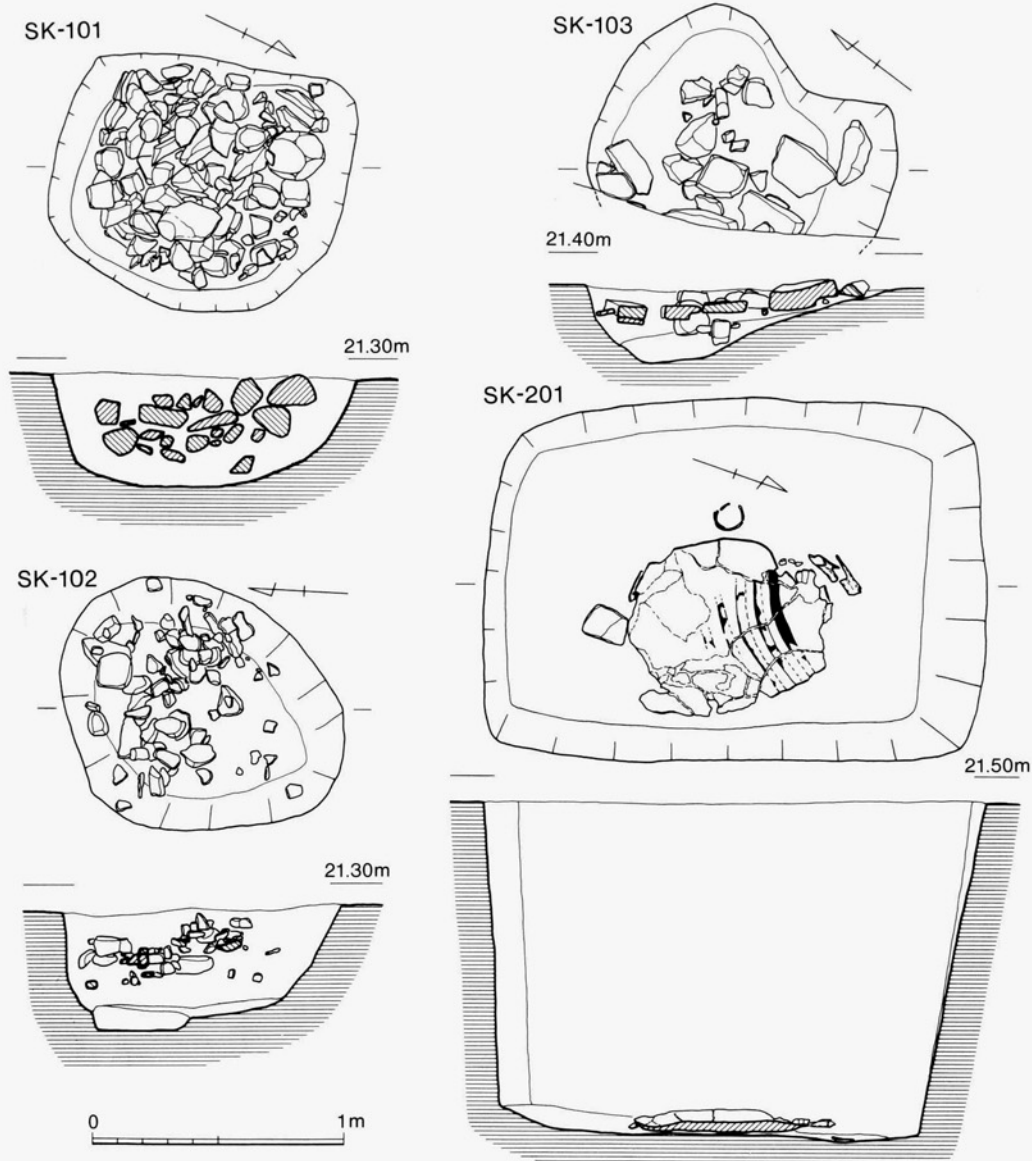
が出土した。廃絶時期は江戸時代中頃~後半と推定される。

#### 4. 土壌 (第13図)

SK-101 I地区の北端に位置し、ST-103を切る平面隅丸長方形の土壌である。長軸118cm、短軸102cm、深さ45cmを測り、長軸方向はほぼ南北である。遺構検出面からほぼ平坦な床面まで、暗灰褐色粘質土の中に、多量の石と共に土器や陶磁器などが廃棄された状態で混在していた。

遺物は、土師器皿(第20図24)・瓦質土器(第21図33)・陶器碗(第21図35)・砥石(第23図70・71)の他、磁器片・用途不明の土製品(第23図73)・青銅製煙管(第25図79~81)など、雑多な物が出土しており、廃棄場と考えられる。時期は、江戸時代前半頃に比定されよう。

SK-102 I地区の東端に位置する土壌である。長軸を南北方向にとり、平面形は不整楕円形。長軸120cm、短軸98cm、深さ52cmを測る。床面北側には、径38cm、深さ8cmの浅い円形の掘り



第13図 土坑実測図

込みを持つ。遺物は、大小様々の多量の石に混在して、土師器片数点が出土した。室町時代末～江戸時代前半頃の遺構とみられる。

**SK-103** I地区の南端に位置する土坑で、西側の一部が調査区外で未掘である。平面形は不整形で、掘り出した部分での最大幅は南北方向に120cm、深さは28cmで南側が浅くなっている。遺物は5～25cm大の石と一緒に、唐津系を含む近世陶器片・染付片・砥石が出土した。時期は江戸時代前半頃に比定されよう。

**SK-201** II地区の南東隅に位置する隅丸長方形の土坑である。長軸200cm、短軸143cm、深さ130cmを測る。ほぼ平坦な床面から、長径80cm、短径70cm、厚さ4cm前後の植物繊維を含む暗褐色の物質を検出。表面には、幅4cmの黒褐色の帯が5状にわたって認められ、また、その

周囲からは、小枝をより合わせた牛の鼻輪・牛角・牛骨片が出土した。時期を特定できる遺物はなかったが、層序的にみると、江戸時代前半もしくはそれ以前のもものと推定される。

SK-301 Ⅲ地区の南側、SB-304の南1mに位置する長楕円形の土壙である。南北方向に長軸をとり、長軸200cm、短軸108cm、深さ14cmを測る。遺物は、瓦質の鍋(第21図28)・土師器杯(第20図3)・皿(第20図17)などが出土した。室町時代後半の遺構である。

SK-302 Ⅲ地区の中央やや東寄り、SB-307の東2mに位置する土壙である。長軸を東西方向にとり、平面形は長軸218cm、短軸134cm、深さ11cmの隅丸長方形。遺物は出土していない。

## 5. 墓(第14～17図)

I地区では、調査区中央やや西よりの南北約20m、東西約10mの範囲において、土壙墓・木棺墓計33基が検出され、Ⅲ地区では、調査区西端において、江戸時代後半以降の現在の寄せ墓に接して土壙墓・木棺墓計9基が確認された。これらは両地区において各々まとまった分布状況を示しており、室町時代末～江戸時代中頃を通じて墓地として形成されたものである。墓壙の形態は隅丸長方形のものが多く、若干例を除いては長軸をほぼ南北方向にとるものがほとんどである。人骨の遺存するものは少なかったが、これらはいずれも頭位は北向きであり、墓壙の大きさからみれば、側臥ないし仰臥屈肢葬と推定される。以下にこれらの概要を記す。

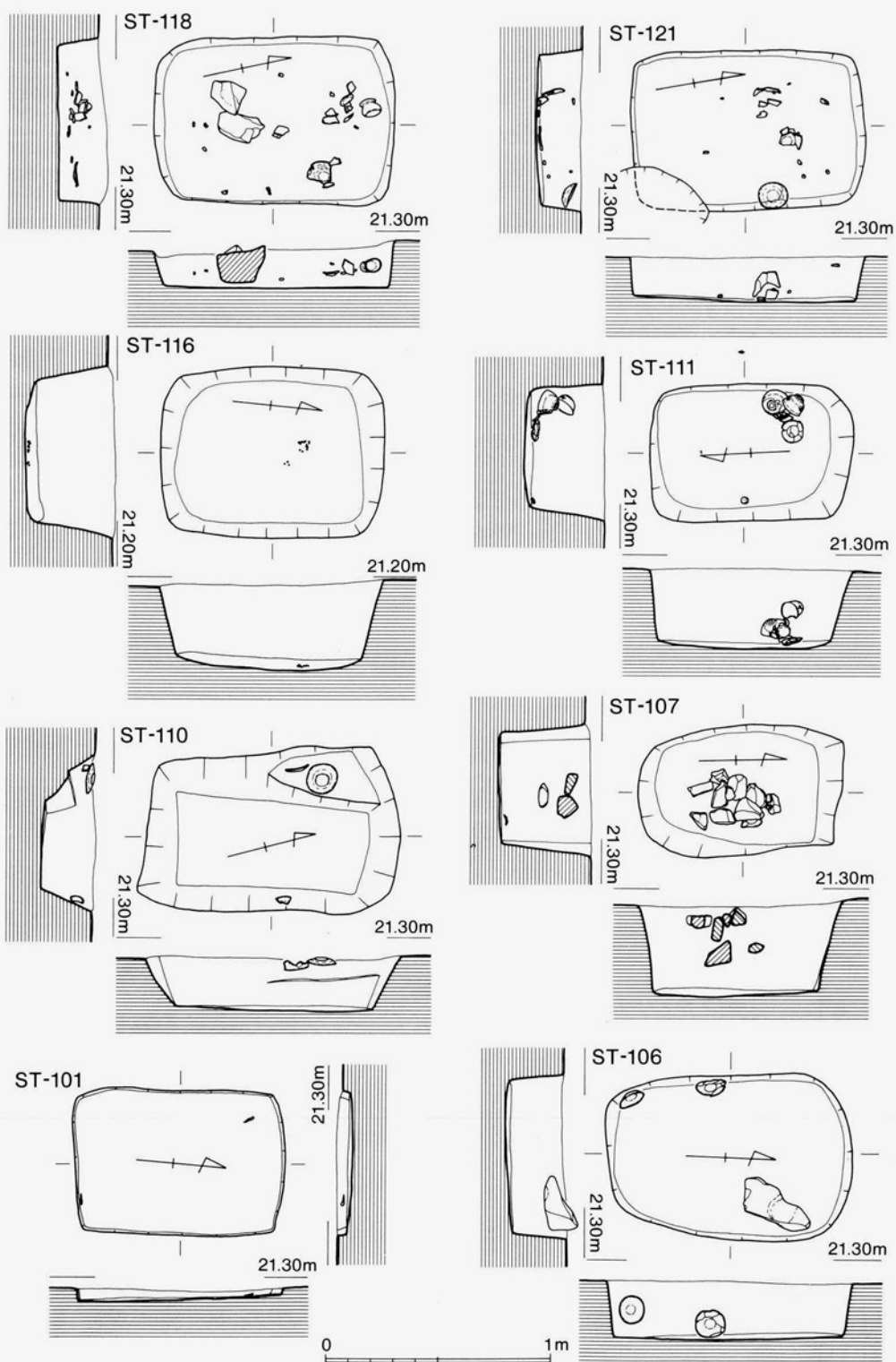
ST-118(第14図) 長さ107cm、幅74cmの隅丸長方形の墓壙をもち、深さ21cm。墓壙内北端中央に土師器皿1点(第22図39)・台付鉢1点(第22図42)、東寄りに土師器皿1点(第22図40)、中央部に土師器皿1点(第22図41)、壙内各所から鉄釘片7点出土した。埋土中には、土師器・瓦質土器・染付の小片が含まれており、径15～20cmの礫2個が検出された。

ST-121(第14図) 隅丸長方形の墓壙をもち、長さ104cm、幅71cm、深さ20cmを測る。南東隅は別のピットによって切られている。墓壙内北半部に土師器皿3個体分(第22図52～54)、各所より鉄釘片10点検出された。鉄釘には木質の銹着しているものが認められ、木棺に使用されたものとみられる。

ST-116(第14図) 隅丸長方形の墓壙で、長さ100cm、幅76cm、深さ40cm。墓壙底の中央北寄りに数珠玉21個(第27図85～105)がまとめて検出された。玉の穿孔部には紐の残っているものがあることから、埋葬時には一連に綴られた状態で、位置的には手に装着あるいは胸あたりに置かれていたものとみられる。

ST-111(第14図) 長さ90cm、幅60cm、深さ35cmの隅丸長方形の墓壙をもち。墓壙内の南東隅近くに土師器皿2点(第22図64・65)・美濃系天目碗1点(第22図66)・唐津系鉄絵碗1点(第22図67)がまとめて検出された。また、西壁沿い中央から「祥符通宝」を含む銅銭計13枚が綴られた状態で出土した。

ST-110(第14図) 長さ113cm、幅70cmの不整な長方形の墓壙で、深さ24cm。墓壙内の北西隅には墓壙上面より一段低くテラスが認められ、この底面より若干上位に土師器皿2点(第22図43・45)、さらに東壁に張り付く形で土師器皿1点(第22図44)が検出された。墓壙の形状



第14图 I地区墓实测图(1)



からみて木棺が使用されていた可能性も考えられる。

ST-107 (第14図) 不整な長方形の墓壇で、長さ91cm、幅58cm、深さ40cmを測る。墓壇底中央やや東寄りに土師器皿1点(第22図59)が検出された。埋土上半には、10~15cm大の小礫10個ばかりがまとまった状態で包含されていた。

ST-101 (第14図) I区の北端で検出された長方形の墓壇で、長さ94cm、幅64cm、残存する深さ5cmを測る。近世における水田開発に伴って、墓壇上面はかなり削平されたものとみられる。北西隅および南東隅近くで鉄釘が各1点(第25図82・83)検出された。痕跡は確認されなかったが、木棺が用いられていた可能性が強い。

ST-106 (第14図) 長さ109cm、幅73cm、深さ25cmの隅丸長方形の墓壇をもつ。墓壇南半の西壁沿いに土師器皿2点(第22図46・47)が倒立した状態で検出された。おそらく木棺が用いられ、棺と掘り方の間に副葬された状況を示すものとみられる。墓壇内の北東側には、長径35cmの大きな礫1個が床面から約15cm上で検出された。

ST-124 (第15図) 長さ124cm、幅97cmの隅丸長方形の墓壇をもち、深さ32cm。墓壇底の中央やや北寄りに土師器皿3点(第22図55~57)が認められ、うち2点は表向きに、1点は裏向きの状態で置かれていた。

ST-125 (第15図) 長さ118cm、幅110cmの不整な方形の墓壇で、深さ26cm。墓壇内四隅には、床面から10~15cm上で陶器片1点・礫3個が認められた。また、鉄釘片や錆の付着した木片が検出されており、木棺が用いられていた可能性が強い。埋土中には、土師器・瓦質土器・近世陶器片などが包含されていた。

ST-102 (第15図) 隅丸方形の墓壇で、長さ70cm、幅64cm、深さ12cmを測る。墓壇内南端に土師器皿2点(第22図50・51)、西寄りで毛抜きかともみられる鉄器片が出土した。

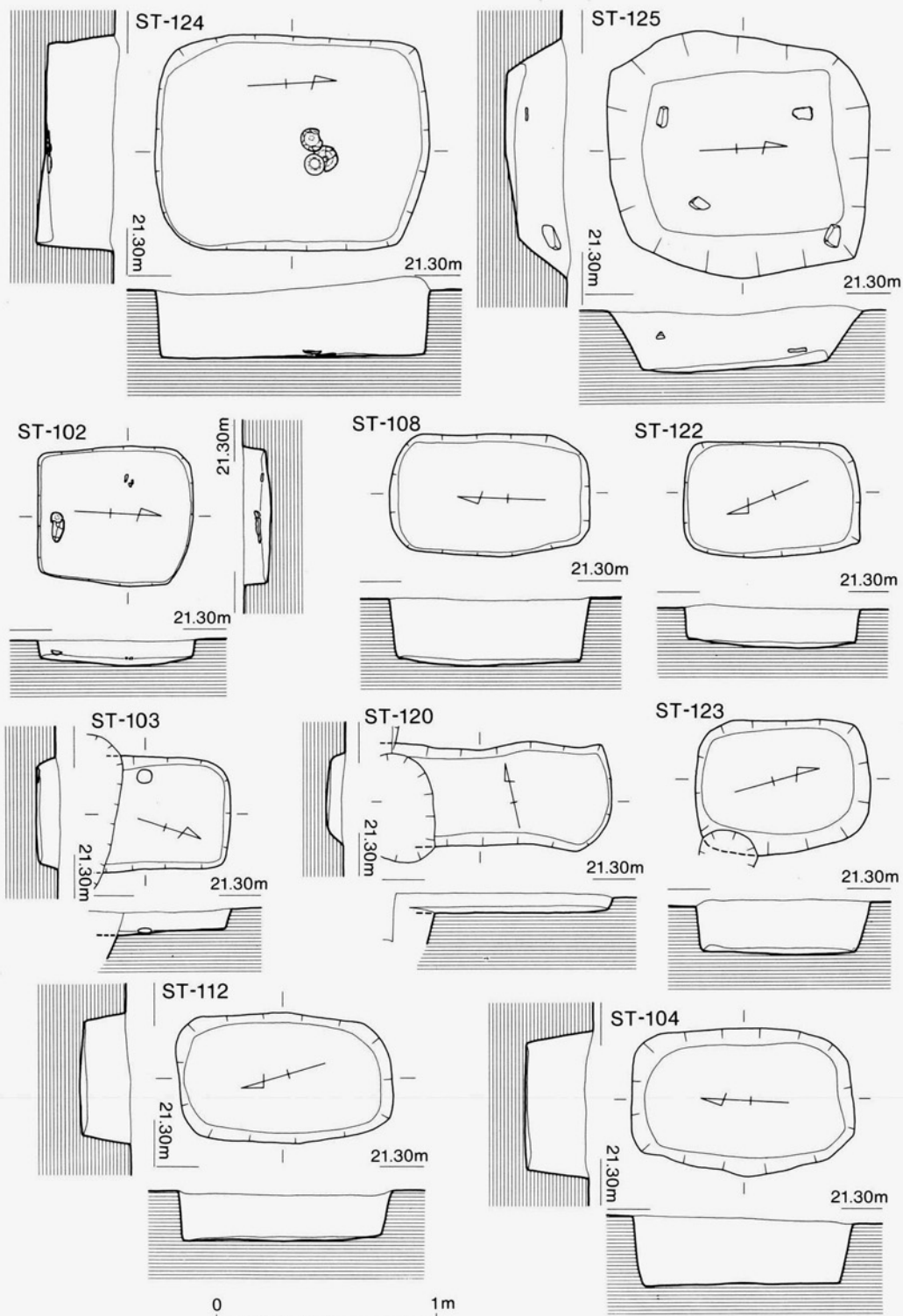
ST-108 (第15図) 長さ91cm、幅55cmの隅丸長方形の墓壇で、深さ30cm。遺物等は全く検出されなかった。

ST-122 (第15図) 隅丸長方形の墓壇をもち、長さ80cm、幅53cm、深さ18cm。南西側をST-120によって切られている。遺物等は検出されなかった。

ST-103 (第15図) 隅丸長方形の墓壇とみられるが、南側をSK-101によって切られており、残存長は57cm、幅51cmで、深さ10cmをとどめる。西壁直下に銅鏡1面(第24図74)が鏡面を上にした状態で出土した。鏡面には和紙が付着しており、これに包まれて埋納された可能性もある。

ST-120 (第15図) 不整な隅丸長方形の墓壇で、西端部は柱穴によって切られている。残存長100cm、幅46cmで、深さ9cmを測る。東側でST-122を切っている。I地区の墓壇の中では、唯一長軸を東西方向に向けている。遺物等は検出されなかった。

ST-123 (第15図) 長さ79cm、幅60cmの隅丸長方形の墓壇をもち、深さ25cm。南東隅を柱穴によって切られている。遺物等は検出されなかった。



第15图 I地区墓实测图(2)

ST-112 (第15図) 不整な隅丸長方形の墓壙をもち、長さ96cm、幅59cm、深さ23cmを測る。遺物等は検出されなかった。

ST-104 (第15図) 長さ100cm、幅65cmの不整な隅丸長方形の墓壙で、深さ31cm。遺物等は検出されなかった。

ST-113 (第16図) 墓壙は小判形を呈し、長さ89cm、幅61cm、深さ20cmを測る。墓壙内南半の底面から10cm上で、長径15cmほどの礫1個が検出された。遺物等は出土していない。

ST-109 (第16図) 長さ101cm、幅58cmの不整な小判形の墓壙をもち、深さ20cm。墓壙内の中央部に長径38cmの大きな礫1個が底面から4cm上で検出され、北寄りの底面から土師器皿1点(第22図62)が出土した。

ST-117 (第16図) 不整な小判形を呈する墓壙で、長さ97cm、幅54cm、深さ42cmを測る。遺物等は確認されなかった。

ST-105 (第16図) 不整な長円形の墓壙で、長さ93cm、幅68cm、深さ55cm。遺物等は検出されなかった。

ST-114 (第16図) 長さ113cm、幅80cmの小判形の墓壙で、深さ46cm。遺物等は検出されなかった。

ST-115 (第16図) 不整な小判形を呈する墓壙で、長さ106cm、幅86cm、深さ29cmを測る。墓壙内北寄りに土師器皿1点(第22図60)が出土した。

ST-119 (第16図) 不整な隅丸方形を呈する墓壙で、南北長82cm、東西長75cm、深さ30cmを測る。墓壙内中央の上位に、径47×27cm、厚さ14cmの大きな板状の礫1個が認められ、その下面から墓壙底の間に小礫がまとまって検出された。

ST-129 (第16図) 径約70cmの不整な円形の墓壙で、深さ35cm。墓壙中央よりやや西寄りに径約30cmの大きな礫1個が認められ、この下面と墓壙底との間に土師器皿1点(第22図61)と小礫1個が検出された。

ST-126 (第16図) 南北径69cm、東西径64cmの不整円形を呈する墓壙で、深さ37cm。墓壙内南側において、底面から14cm上に土師器皿1点(第22図63)と銅銭7枚が出土した。銅銭は綴った状態で埋納されており、7枚が錆着しているため判読不能である。

ST-133 (第16図) 不整な円形の墓壙で、南北径50cm、東西径48cm、深さ30cm。墓壙内西側に、底面から13cm上で土師器皿1点(第22図58)が検出された。

ST-127 (第3図) 径69cmの円形の墓壙をもち、深さ29cm。

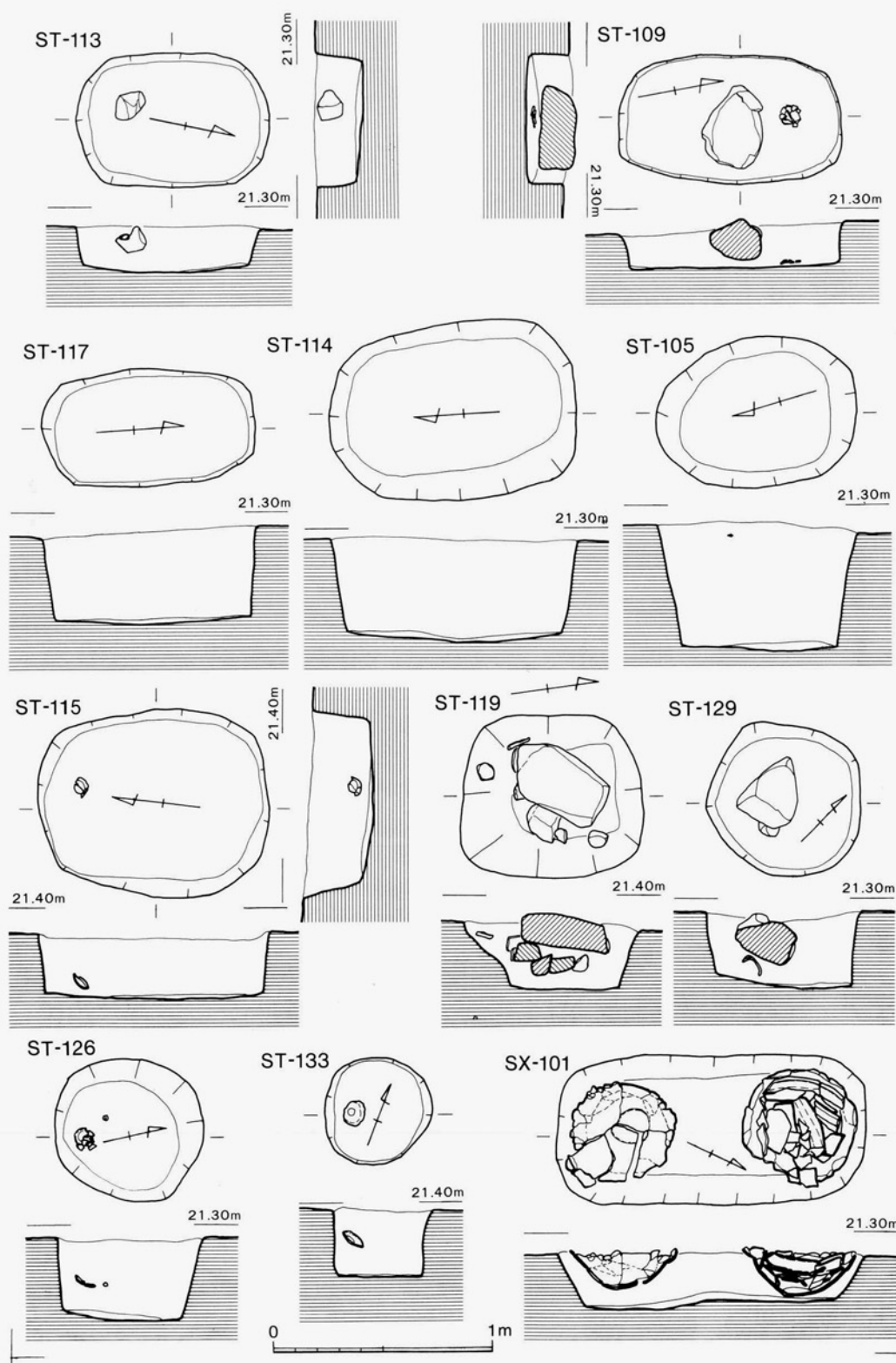
ST-132 (第3図) 東西径72cm、南北径74cmの不整な円形の墓壙で、深さ26cm。

ST-131 (第3図) 径約65cmの不整な円形の墓壙で、深さ40cm。

ST-130 (第3図) 南北径57cm、東西径54cmの不整な円形の墓壙で、深さ52cm。

ST-128 (第3図) 円形の墓壙で、径約60cm、深さ31cm。

ST-307 (第17図) 隅丸長方形の墓壙であるが、西壁側は調査区外に入るため不明。長さ



第16图 I地区墓・埋葬遺構実測図

116cm、幅48cm以上、深さ25cmを測る。墓壙内北寄りに、底面上15～20cmで土師器皿2点（第22図48・49）が検出された。墓壙上面はかなり削平を受けているとみられる。

ST-306（第17図） 長さ99cm、幅54cmのやや不整な隅丸方形の墓壙で、深さ約25cm。底面は、北から南へ向けてやや傾斜している。墓壙内北東近くと中央南寄りに、大小2個の礫が検出された。

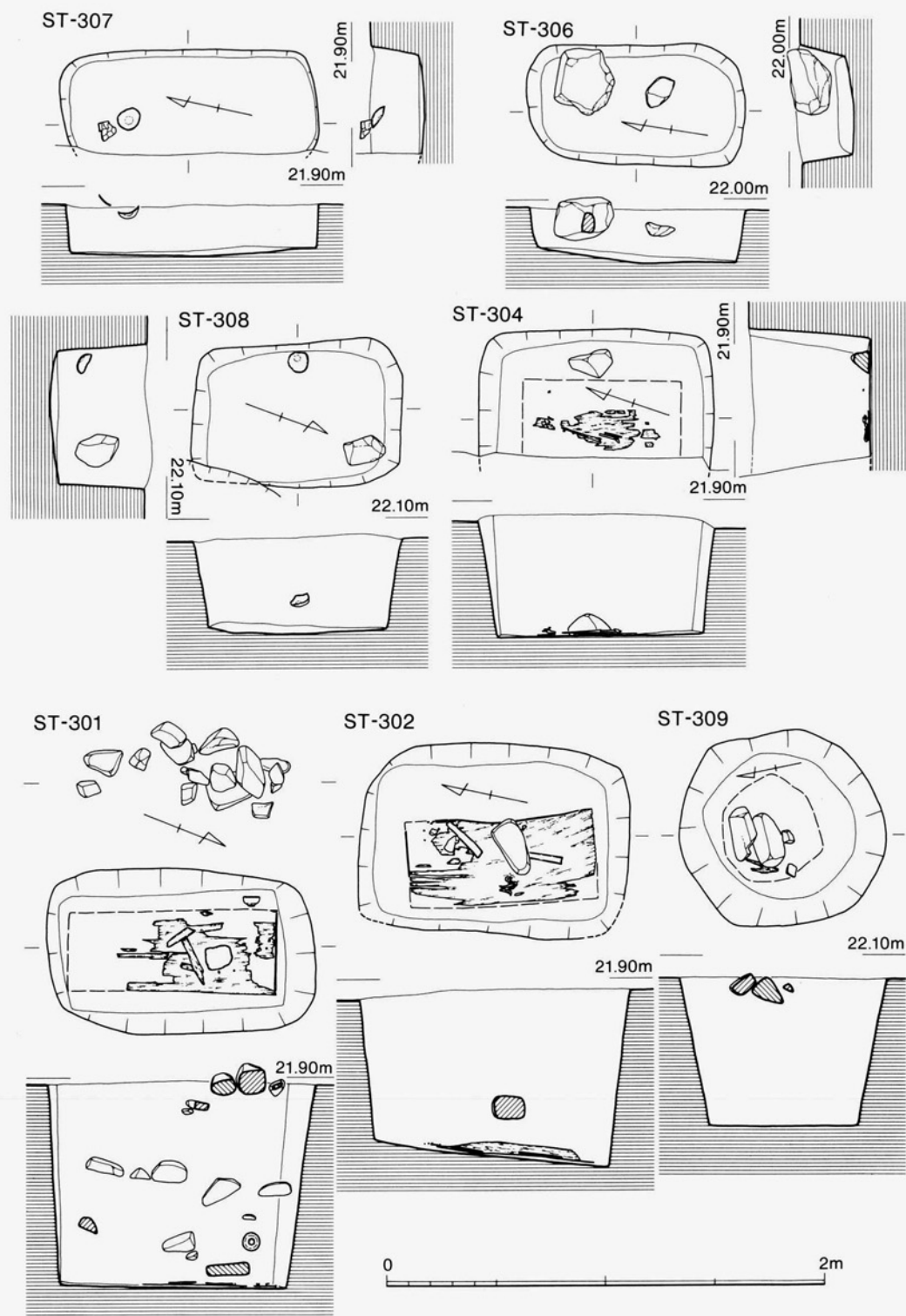
ST-308（第17図） 墓壙は隅丸長方形を呈し、長さ95cm、幅65cm、深さ43cmを測る。墓壙の南東隅は、ST-309によって切られている。墓壙内には、西壁中央に漆碗1点、北東隅に礫1個が検出され、底面の中央北寄りに人歯1本が残存していた。

ST-304（第17図） 隅丸長方形の墓壙をもつが、西壁は調査区外に入るため不明であり、長さ107cm、幅60cm以上、深さ54cmを測る。底面には木棺の底板が残存し、埋土の区別によって木棺の大きさが推定し得る状況であった。木棺の長さは72cm、幅35cm以上で、底板の厚さは現存2～3mmであった。棺内には、成年の女性かとみられる頭骨片・歯・右上腕骨・右前腕骨の一部が遺存しており、埋葬姿勢は頭位を北に向けた側臥ないし仰臥屈肢葬と推定される。棺と掘り方東壁との間には、礫1個が置かれていた。

ST-301（第17図） 長さ122cm、幅75cmの隅丸長方形の墓壙で、深さ約92cm。墓壙底に、木棺の底板と北小口板の一部が残存していた。棺の大きさは、長さ95cm、幅39cmと推定される。棺内北半に頭骨片や歯が散在し、中央西寄りに下肢骨かとみられる骨片が検出された。成人人骨と推定されるが、性別不明。この東側には棺の蓋板の一部とみられる木片が認められた。墓壙の北西隅には、染付碗（第22図68）1点が棺外副葬されていた。墓壙の上面および墓壙内下半には、大小の礫多数が認められた。

ST-302（第17図） 長さ123cm、幅86cmの隅丸長方形の墓壙をもつ。底面が北から南へ傾斜しており、深さは北側で64cm、南側で80cmを測る。墓壙底には、やや西側に偏して木棺の底板・東側板・北小口板の一部が残存していた。底板は1枚の板が用いられ、側板とともに厚さ5～8mm。棺の大きさは、長さ86cm、幅40cmと推定される。棺内には、成年女性の頭骨・歯・左上腕骨・右前腕骨・下肢骨などの一部が遺存していた。埋葬姿勢は、頭位を北に向けた側臥ないし仰臥屈肢葬とみられる。右前腕骨の下位周辺からは、木製の櫛1点（第26図）・「寛永通宝」2枚（第24図）を含む銅銭計6枚・数珠玉19個（第27図106～122）が検出された。位置的にみて、右手の辺りにまとめて副葬されたものであろう。なお、墓壙のほぼ中央部、底面から17cm上で長径25cmの礫1個が検出された。

ST-309（第17図） 径約90cmの不整形の墓壙で、深さ68cm。底面に木棺の一部が残っており、埋土の区別によれば径約45cmのややいびつな円形状の底板が推定される。掘り方の形状と併せてみると、桶棺であったものとみられる。棺内西半部底面には、人歯と骨片がわずかに残存し、棺の中央北寄りに、底面から約10cm上で木製の櫛と漆碗片が検出された。被葬者は女性と推定されるが、年齢不明である。墓壙上面近くには、大小4個の礫が認められた。



第17图 III地区墓実測図

ST-303 (第4図) 墓壇の大半が調査区外にあり、しかもST-302・304によって南北両側を切られているため、規模は明らかでない。墓壇の幅は85cm程度と推定され、深さは約70cm。底面には、板目が東西向きの木棺底板の一部が検出され、幅は推定49cm。長軸は東西方向をさすものとみられる。

ST-305 (第4図) 隅丸長方形の墓壇とみられるが、大半が調査区外に入るため一部の調査にとどめた。長さは100cm以上、幅40cm以上で、深さ約100cm。底面に木棺の一部を検出したが、大きさは未確認である。

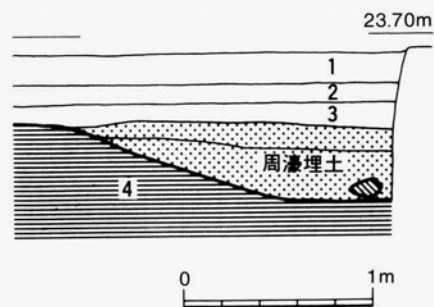
## 6. 埋甕遺構

SX-101 (第16図) I地区の中央部やや東寄り、SK-124の東隣に位置する。長さ140cm、幅68cm、深さ20~25cmの隅丸長方形の掘り方内に、瓦質大甕2個体が、北と南に並置された状態で検出された。南側の甕(第21図38)は、胴部下半以下しか残っておらず、北側の甕(第21図37)も同様でしかも口縁部が中に落ち込んでいたことから、本来は完形の甕2個が埋置されていたのが、おそらく近世のある段階での水田開発時に、上半部が削平・破壊されたものとみられる。北側の甕は、口径73cmで、器高は80~90cmと推定される。甕の内部や掘り方内からは、何も検出されなかった。I地区の埋葬遺構群の一画に位置し、これらと時期的には併行するものであることから、墓に何らかの関連を有する遺構の可能性が強いとみられるが、埋葬遺構そのものであるのかどうかを含めて、その性格は明らかでない。

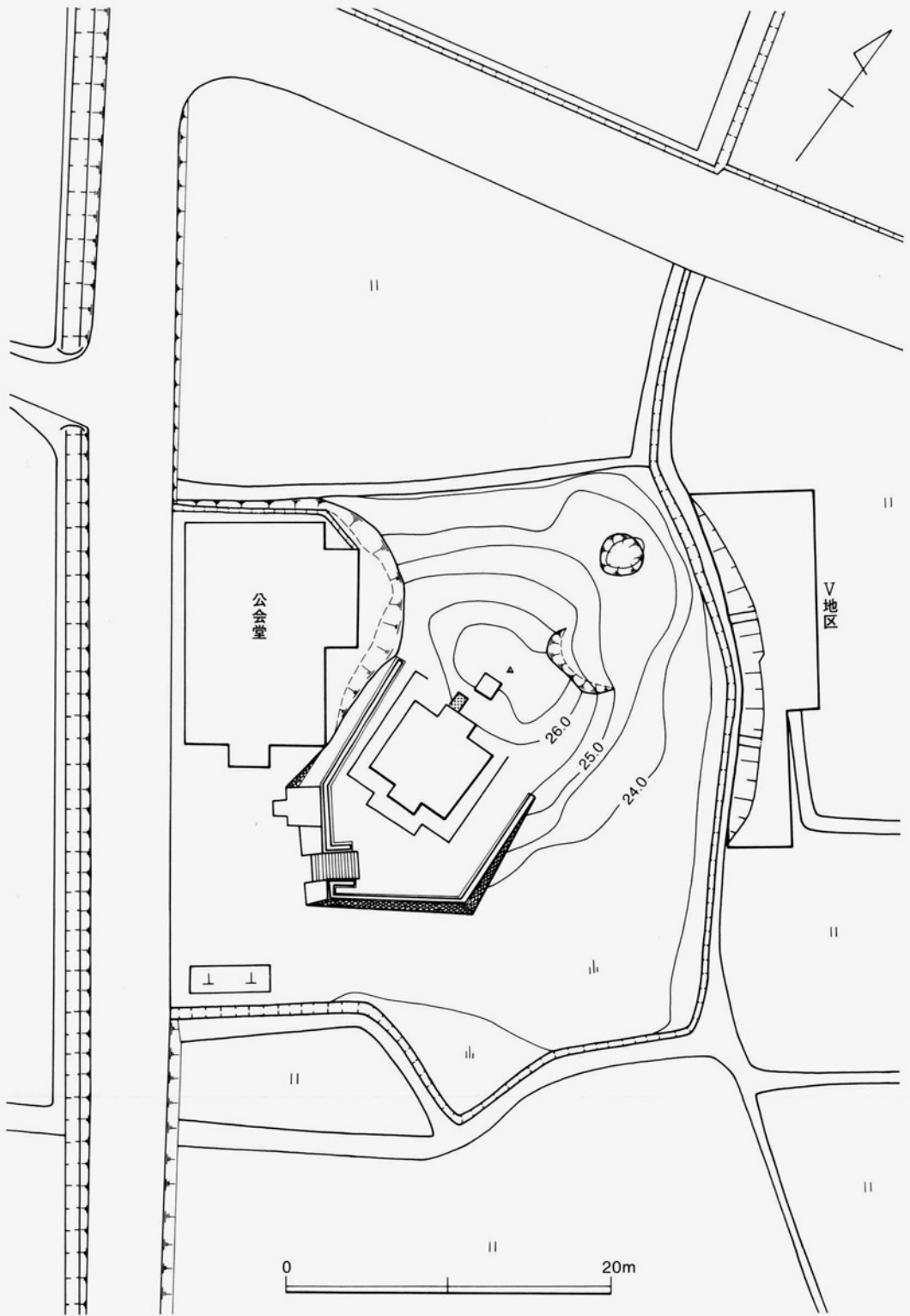
## 7. 古墳周濠

V地区の大日寺古墳墳丘東側裾部において、南北に約21mにわたって弧状に巡る古墳の周濠の一部を検出した(第6図)。この地区の基本的層序は、1:耕土、2:床土、3:暗灰褐色粘質土層、4:地山(橙灰色粘質土)からなり(第18図)、周濠は地山面において検出されたものである。深さは約40cmを測り、上半に暗灰色粘質土、下半に暗灰黒色粘質土の堆積が認められ、底部には径10~50cm大の礫が若干含まれていたが、遺物は全く検出されなかった。直上の暗灰褐色粘質土層には、中世土師器が包含されており、中世の段階に上面は若干削平を受けているものとみられる。周濠幅については、調査区内で東肩から1.7mほど確認したが、西側が調査区外にあたるため不明確である。東肩から底部への傾斜や墳丘裾部の立ち上がりの状況などからみると、約3m程度の幅ではないかと推定される。

大日寺古墳については、これまで調査されたことがなく、その規模や時期等については曖昧であり、墳形についても帆立貝式の可能性も想定された。過去において墳頂部南半から墳丘南側にかけては大日堂が建立され、西側は公会堂によって墳丘が大きく破壊されており、東と北側がわずかに原状をとどめ



第18図 古墳周濠土層図



第19図 大日寺古墳地形測量図(網目は石棺の位置)



るのみであった。墳頂部の大日堂北側には、主体部とみられる箱式石棺が露出した状態で一部残存している。

今回の調査では周濠部の検出と併せて古墳の地形測量を行った（第19図）が、それらの結果に基づいて古墳の規模を推定復元してみると、周濠を含む直径約37m、墳丘の直径約30m、高さ約4mの円墳とみられ、残存する石棺は、墳丘のほぼ中心にその長軸を南北に向けて位置していることになる。古墳の築造時期については、副葬遺物等が全く不明ではあるが、主体部が箱式石棺であることなどからみて、おそらく5世紀代、下っても6世紀初頭頃と推定される。いずれにしても従来確認されている田部盆地における古墳の中では、最も古くかつ最大規模を有するものとして位置づけられよう。

## V 遺 物

今回の調査で掘立柱建物の柱穴・井戸・溝・土壇・墓など各遺構や包含層から出土した遺物には、土器・土製品・石製品・金属製品・木製品・玉類・動植物遺体などがある。

### 1. 土 器（第20～22図）

集落関連遺構や墓の副葬品を中心として、中世～近世に属するものを主体とする土師器・瓦質土器・陶磁器などが出土した。なかでも土師器が大半を占めている。このほか弥生土器・須恵器が認められたが、いずれも小片で量的にも少なく、中世～近世の遺構・遺物包含層への混入物である。

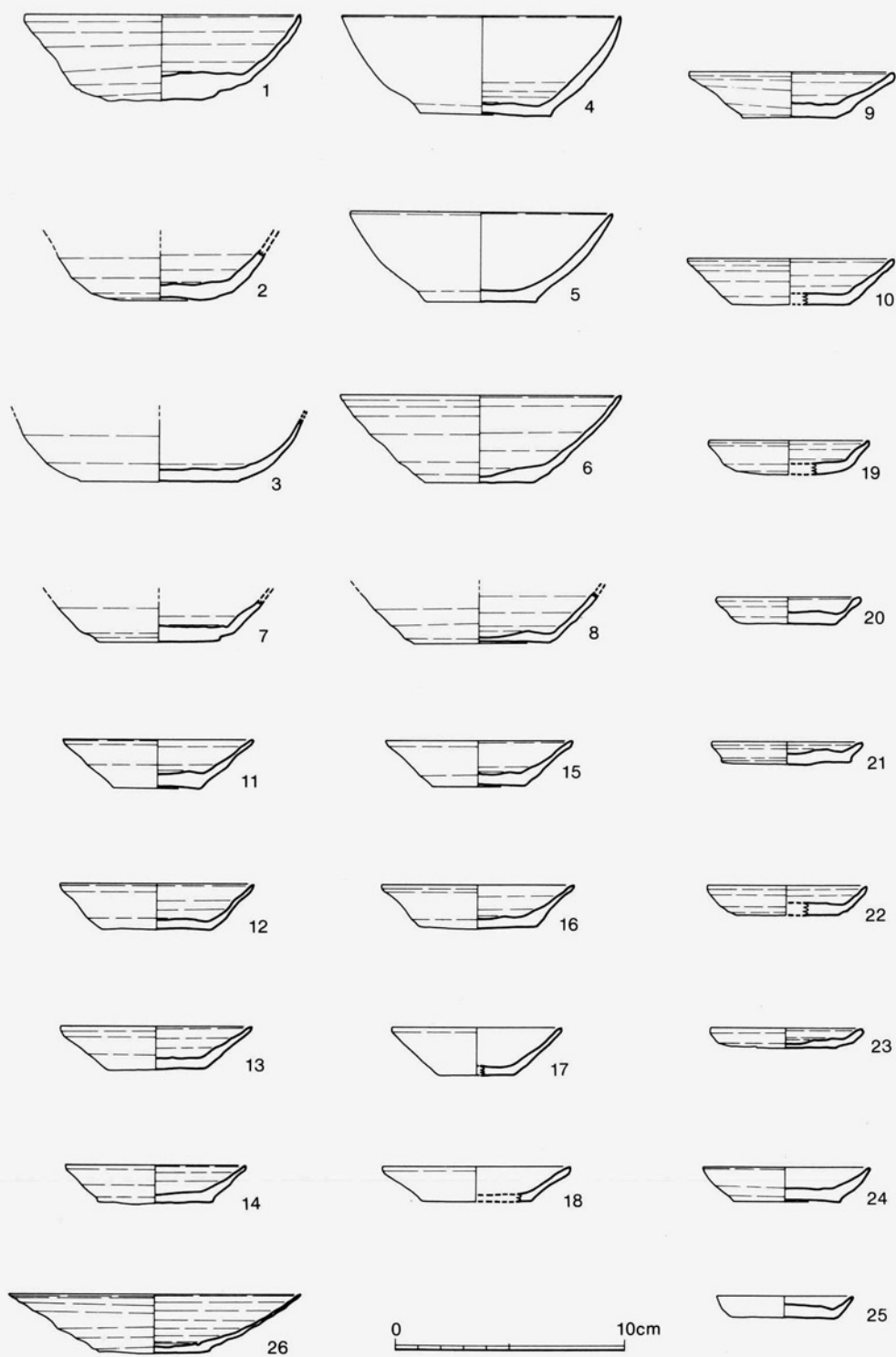
土師器には、杯・皿・鉢があり、量的には皿が大半を占めている。

杯（1～8）には、口径12cm前後、器高4cm前後で、体部がやや内湾気味に立ち上がり、底部が厚手で底端部が丸みを持つもの（1～3）と、角張るもの（4～6）がある。7・8は口縁部を欠いており、皿の可能性もある。いずれも底部は回転糸切りで、体部はナデ調整。

皿は、集落関連遺構出土のものと墓に副葬されたものとでタイプを異にしている。前者は小皿が大半を占め、法量によって、A：口径約9cmで器高2cmのもの（9・10）、B：口径8cm前後で器高1.5～2.1cmのもの（11～18）、C：口径6～7cm前後で器高0.9～1.5cmのもの（19～25）の3種に大別される。

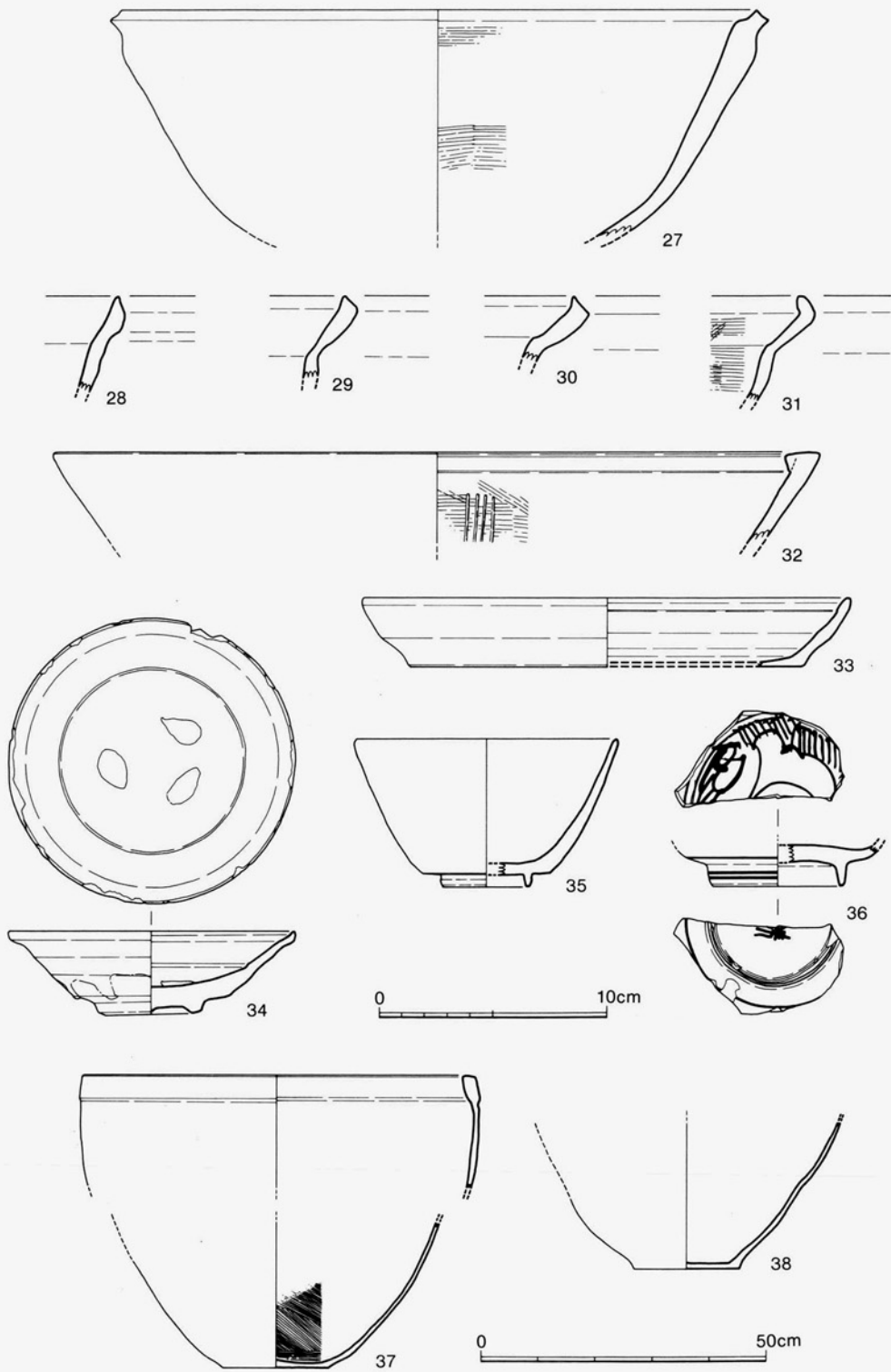
後者の墓に副葬されたものでは、A：口径13cm前後で、器高2.7～3.0cmの深めのもの（39・43・44・47・58）とこれよりやや浅いもの（46）がある。さらにB：口径12cm前後で、器高2.8～2.9cmの深めのもの（40・50）と器高2.2～2.5cmの浅いもの（41・45・52・53・59）がある。C：口径10～11cmで器高1.7～2.3cmのもの（48・49・55～57・60～65）、さらにD：口径6.7cm、器高1.8cmの小皿があり、大別4種が認められる。26は柱穴出土であるが、墓に伴う皿Aタイプの浅めのものに属する。これらの皿は、総じて器壁が薄手の特徴をもち、底部は回転糸切り、体部はナデ調整である。

これらのほか土師器には、外開きの低い総高台をもつ小鉢（42）がある。



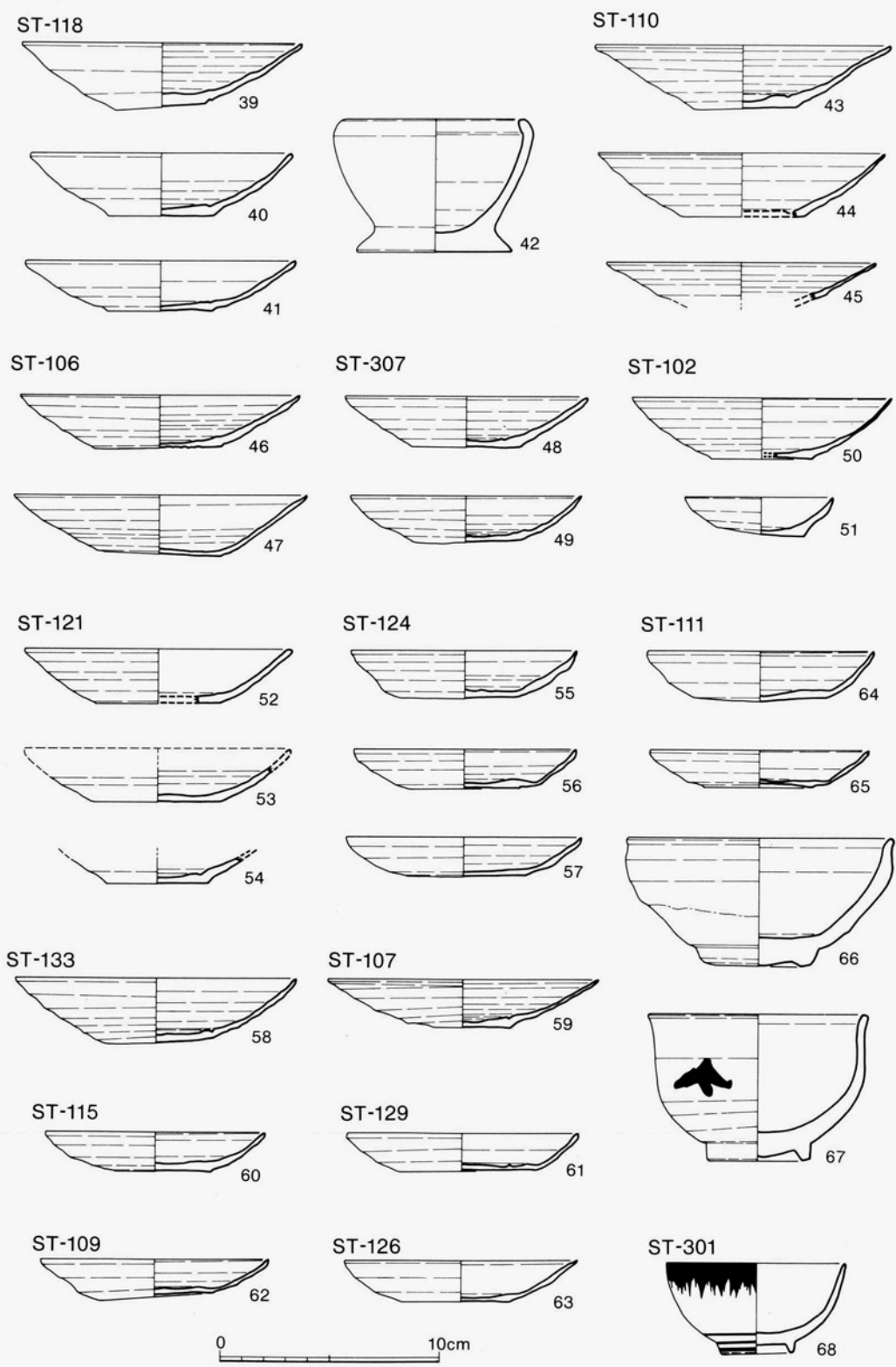
第20图 出土土器实测图(1)

1-2: SP421出土, 3-17: SK301出土, 4: SP415出土, 5: SP423出土, 6: SP391出土, 7: SP427出土, 8: SP412出土, 9: SP451出土, 10-19: SP339出土, 11~16: SP302出土, 18: SD305出土, 20: SP396出土, 21: SD304出土, 22: V地区床土出土, 23: SP408出土, 24: SK101出土, 25: SP362出土, 26: SP10出土



第21图 出土土器实测图(2)

27: SD302出土, 28: SK301出土, 29~32: SE601出土, 33: SK101出土, 34: I地区床土出土, 37-38: SX101出土



第22图 出土土器实测图(3)……副葬土器

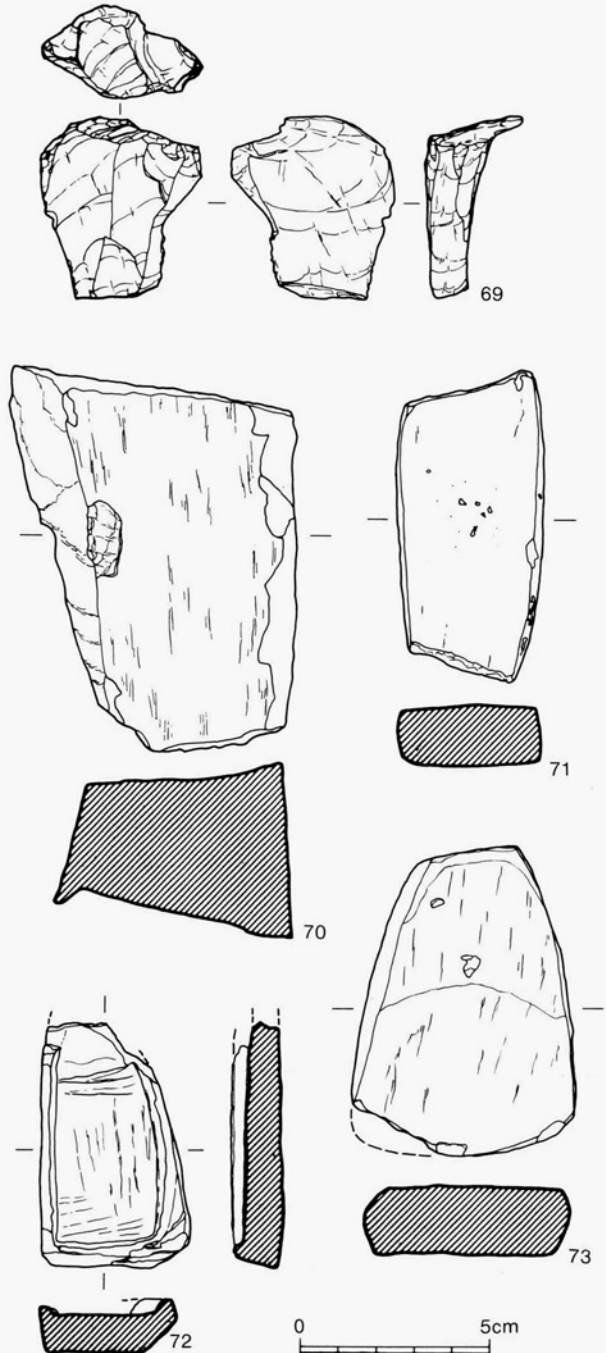
瓦質土器は、量的にはあまり多くなくほとんどが小片である。鍋（27～31）・播鉢（32）・浅鉢（33）・大甕（37・38）などがあり、鍋が大半を占めている。

陶磁器には、美濃系の天目碗（66）、唐津系の鉄絵碗（67）や皿（34）、伊万里系の染付碗（68）・染付皿（36）などがある。

これら出土土器の時期については、天目碗（66）は16世紀後半、鉄絵碗（67）は16世紀末～17世紀初頭に比定されており、しかも64～67はST-111の副葬一括遺物であることからみて、64・65の土師器皿も16世紀末～17世紀初頭に位置づけられよう。とすれば、法量を除いて特徴を同じくしていることからほぼ同一時期の所産とみられる墓出土の他の土師器皿および共伴する鉢（39～63）も当該期に比定してよいであろう。集落関連遺構出土の土師器皿（26を除く）については、墓副葬の土師器皿と同一タイプのものが認められず、杯や瓦質鍋（31）・播鉢などの特徴を勘案すれば、相対的に古く位置づけられるものとみられ、室町時代後半に比定して大過ないであろう。瓦質鍋27～30は、形態的にはさらにこれらに先行するものである。瓦質浅鉢（33）・大甕（37・38）は室町時代末～江戸時代初頭、唐津系皿（34）は江戸時代初期、伊万里系染付碗（68）は江戸時代中期ごろ、染付皿（36）は江戸時代後半の所産であろう。

## 2. 土製品・石製品類（第23図）

今回の調査で、土製品・石製品類の出土は極めて少ない。69は旧石器で、石刃石核の再生剥片。両側縁に使用痕が認められる。V地区床土出土。70・71は砥石。70は破片で、一面を使用。



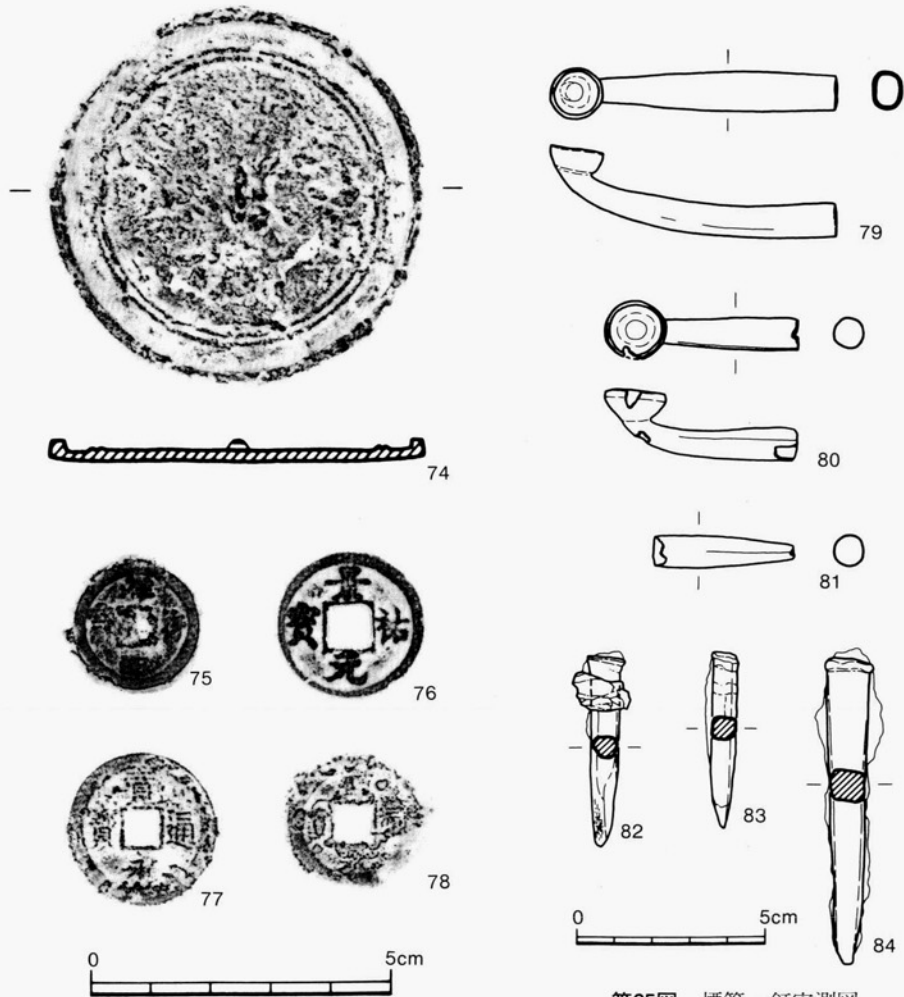
第23図 石製品・土製品類実測図

71は扁平な板状の小型品で、両面と両側面の4面を使用。両者ともSK-101出土。72は硯。平面はいびつな台形状を呈す。海部の一部を欠失し、陸部中央は使用のため若干くぼむ。残存長6.4cm、幅3.9cm、厚さ1.3cmの小形品。SP-201出土。73は撥形を呈した板状の土製品。長さ8cm、最大幅5.8cm、厚さ1.8cmで、広端縁部の一部を欠失する。平瓦を転用して整形・研磨したものとみられる。用途は不明である。SK-101出土。

### 3. 金属製品類

鏡(第24図) 小型の青銅鏡で、面径6.3cm。縁の高さ0.3cm、縁幅0.25cm、反り0.1cmを測る。内区と外区の界圏は二重圏。鈕は長さ1cm、幅0.3cmの細長い素鈕で、高さ0.15cm、紐が遺存している。銹化のため、内外区文様はその有無を含めて判然としない。鏡面には和紙が付着しており、これに包まれていたものとみられる。ST-103出土。

銅銭(第24図) 土墳墓ST-111から「祥符通宝」(75)など13枚、土墳墓ST-126から7枚、木棺墓ST-302から「寛永通宝」(77・78)など6枚、柱穴SP-301から1枚、Ⅵ地区の耕土中か

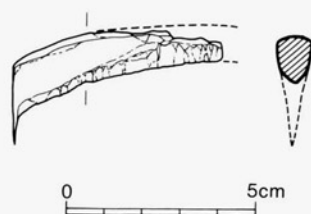


第24図 鏡・銭拓影実測図

第25図 煙管・釘実測図

ら「景祐元宝」(76) 1枚の合計28枚が出土した。墓の副葬例はいずれも錆着が著しく、判読不能のものが大半を占める。

煙管(第25図) 雁首(79・80)と吸い口(81)が出土している。79は、火皿まで含めた長さ7.6cm、円筒部径1cm、火皿の径1.4cm。80は、全長5.1cm、円筒部径0.9cm、火皿の径1.6cm。81は、長さ3.7cm、径0.9cm。この80・81は、同一



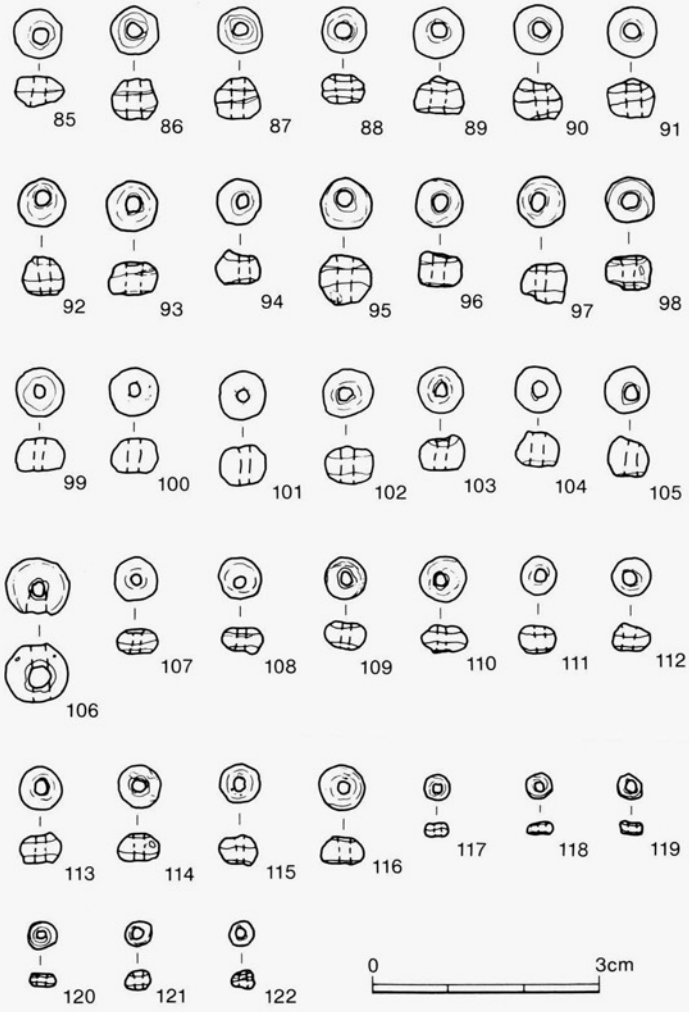
第26図 櫛実測図

個体の可能性がある。いずれも青銅製で、側面に円筒製作時の接合痕が認められる。これらはSK-101から出土。このほか、SE-601から真鍮製の吸い口1点が出土している。

鉄釘(第25図) 墓壙などから計20点ばかりが出土した。断面方形で、頭を片側へ折り曲げたものが大半である。82は長さ5cm、83は長さ4.6cmで、いずれも太さ0.6~0.7cm。ST-101出土。84は、長さ8cm、太さ0.9cm。SP-358出土。このほか、木棺に用いられたものは、太さ0.2~0.3cmの細いものが多い。

その他、毛抜の支点折り曲げ部とみられる鉄器片がST-102から出土している。

厚さ0.1~0.2cm、幅0.6~0.8cmばかりの鉄板を、U字形に折り曲げたものである。



第27図 数珠玉実測図

#### 4. 木製品類

櫛(第26図) 横櫛で、棟部から片側の歯側縁部を残すのみである。棟部はやや厚手で弧を描き、厚さ1cm。ST-302出土。横櫛は、このほかST-309でも断片が出土している。

このほかの木製類品として、ST-308・309で各1点漆椀が検出され、SE-301・601から曲物・桶などの一部が出土している。

#### 5. 玉類(第27図)

数珠玉がST-116から21点、ST-302から19点出土した。

両者とも穿孔部に紐の痕跡をとどめていたことから、副葬時には綴られていたものとみられる。

ST-116出土の85～105は、径5.75～6.95mm、厚さ4.2～6.2mmで、径1.5～2mm前後の穿孔を有す。いずれもガラス製で、半透明の淡い乳白色を呈す。99～105は表面が白色に風化している。

ST-302出土の106～122は、A：半透明の淡い乳白色を呈するもの（106～110）、B：濃緑色のもの（111～114）、C：淡い茶色のもの（115・116）、D：黄褐色を呈するもの（117～122）の4種類が認められる。Aのうち106は、径8mm、厚さ7.4mmと最も大きく、3孔を有す。107～110は、径5.2～5.9mm、厚さ3.2～3.4mm、孔径約1.5mmを測る。Bの111～114は、径4.9～5.4mm、厚さ3.7～3.95mmで、孔径約1.5mm。Cの115・116は、前者が径5.15mm、厚さ3.7mm、後者が径5.75mm、厚さ3.6mmで、孔径はいずれも約1.5mm。Dの117～122は小型品で、径3.1～3.6mm、厚さ1.7～2.6mm、孔径約1～1.5mm。これらはいずれもガラス製である。

## Ⅵ ま と め

今回の調査で検出された遺構には、掘立柱建物・溝・井戸・土壇など集落を構成するものと、土壇墓・木棺墓からなる墓地がある。これらは、室町時代後半から江戸時代前半にわたるものであり、当該期における村落のあり方などを窺う上で、貴重な資料となり得るものである。さらに、大日寺古墳の裾部では、周濠の一部を確認することができ、その規模や形状を推定する手がかりを提示することとなった。以下、今回の調査成果を踏まえて若干の問題点に触れ、まとめたい。

まず、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ地区で検出された各建物群相互の関連性およびその性格についてである。これら各地区の建物群は、台地の微地形からみると、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ地区のものが同一の微高地上にあるが、Ⅵ地区のものはこれらと浅い谷筋で隔てられており、別個の単位を構成する建物群の一部として識別される。さらにⅢ地区とⅣ地区の建物群については、この間の水田に設定したトレンチでは全く遺構が認められなかったことから、両者は、また別個のまとまりをもつ単位とみてよい。Ⅱ地区とⅢ地区の建物群については、間に畦畔が介在し、Ⅱ地区北寄り部が水田造成時に削平を受けているため、両者の建物群が一連のものかどうか単純には判別しがたいところがある。

そこでまず、Ⅲ地区の状況から検討してみよう。Ⅲ地区では、建物群は、SB-308を除いて調査区南半の東半部に集中しており、井戸や土壇も同じくこの一画を占めている。調査区の北と西端近くには、東西溝SD-303と南北溝SD-302が走っている。両溝と建物群との位置関係からみて、この両溝がⅢ地区の北と西側を画する機能をもったものとみてよいであろう。北と西側を溝で画された区画内には、南東寄りに位置する建物群との間に広い空白部が存在する。その使用目的は定かではないが、何等かの機能を有した広場であったことは間違いない。さらに建物群は、若干南と東へ広がるものと推定されるが、東側については、近くまで谷筋が入り込んでおり、地形上の制約によってさほど大きく広がりをもつとは考えられない。当初Ⅲ地区東



側に設定した第3・4・19トレンチにおいても、柱穴等遺構分布は極めて稀薄であった。しかも、第4トレンチでは幅約40cmの南北溝が検出されており、これがSD-302・303と機能的に対応するものとすれば、少なくとも建物群は東・西・北側の三方を溝で画されていたことになる。ちなみにこの東西両溝間の芯々距離は約36mを測る。

問題は南側への広がり状況であり、Ⅱ地区の建物群との関連性である。ここで、仮にⅡ地区とⅢ地区の建物群が一連のまとまりをもつ単位であるとするならば、Ⅲ地区建物群の西側を画す溝SD-302がⅡ地区の建物群の位置する地点まで延びていないことは不自然であろう。さらに、両地区の建物柱穴群の密集度が極めて疎と密の対照性を示すことも問題となろう。むしろ逆に別個のまとまりをもつ建物群の単位と考えれば、Ⅱ地区の削平をほとんど受けていないSB-203からSB-205にかけての空白部についても、Ⅲ地区北西の広場とみられる空白部に対応する同じ機能をもつものとして、各建物群にともなう占有区画内の空間利用形態をうかがう上で理解しやすい。その場合、Ⅰ地区の井戸SE-101はⅡ地区の建物群に伴うものと推定すれば、さらに妥当性を強くする。こうした点からみて、Ⅱ・Ⅲ地区の間に両者を画する東西溝が介在したか否か明らかではないものの、両者の建物群は別個のまとまりをもつ単位である蓋然性が高いものと推定される。

このようにみれば、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ地区で検出された各建物群は、各々別個の単位を構成するもの、あるいはその一部であると推定されよう。さらにⅣ地区の建物群については、SD-401がⅢ地区のSD-302・303同様に1つの建物群の単位を画するものであるとすれば、SB-403・402とSB-401は別の単位を構成する一部と想定されよう。

では、こうした各建物群の単位は、中世から近世初頭の村落社会において、どのような性格のものとして位置づけられるものであろうか。検出状況の比較的良好なⅢ地区のあり方を通じてみてみたい。

Ⅲ地区では、溝で囲郭された方形に近い空間内に、建物群・井戸・土壇・広場がセットとなって存在する。これらは、互いに有機的な関連性をもって機能していたものであるとみられ、1つの完結的な日常生活の居住単位であり、村落社会における一定レベルでの構成単位でもあったと推定してよいであろう。

その溝で区画された占地空間の広さは、東西間約36m、南北間は約35～40mと推定され、面積約1350㎡前後となる。この空間内に何棟の建物が同時に存在したのか、厳密には定かでない。しかし、建物柱穴群の分布範囲や密度、復元し得た建物の平均的な規模から推定すれば、同時に10棟を越えることはまず考え難い。おそらく、数棟の建物で構成されていたものと考えられる。検出した建物には規模の大小が認められることから、主屋や付属屋などの機能的な違いは当然あったこととみなされる。

こうした溝で区画された一定空間を占有し、数棟の建物群で構成される単位とは、当時の村落社会の中でどの様な集団であったのであろうか。同じように溝で区画された空間内に数棟の

建物群などを有する単位は、坂ノ上遺跡の北方に位置する小出遺跡<sup>6)</sup>や田畑遺跡<sup>7)</sup>などでも認められ、これが当地域における基本的な村落構成の単位形態の1つであることが窺われる。しかしながら、村落内の全てがこうした形態の単位で構成されていたのかどうかについては、調査面積の問題があるため、現状では一律に論ずることはできない。とくに、今回Ⅱ地区の柱穴での硯の出土は示唆的である。一定の面積を占有し、かつ数棟の建物群を所有し得た集団であることと相俟って、少なくとも最下層クラスの集団ではないとみてよいであろう。むしろ、若干上位の富裕層の集団とみなすことが妥当ではないであろうか。更に今後の検討が必要である。

今回の調査では、Ⅰ地区で33基、Ⅲ地区で9基の計42基にのぼる多数の埋葬遺構が検出された。Ⅰ地区の墓葬は、南北約20m、東西約10mの範囲にまとまって分布しており、北側に若干延びる可能性はあるものの、ほぼ1つの墓域として完結した状態を示している。また、Ⅲ地区の9基は、この西側に営まれた江戸時代後半以降の寄せ墓の下層に位置しており、この墓地の東端を占めるものである。

墓壇は、隅丸長方形ないし隅丸方形に近いプランのものが大半を占め、小判形のものや円形に近いものなどがある。隅丸長方形ないし隅丸方形に近いものでは、長軸はⅠ地区ではST-120、Ⅲ地区ではST-303を除いてすべてほぼ南北方向をさす。墓壇内や上面に礫を伴うもののがかなり認められたが、少なくともST-301やST-309のように上面に位置するものについては地上標石とみられる。壇内に含まれるものについては、木棺ないし遺体の上部中央やいずれかに片寄せた部位に置かれた可能性のあるものがあり、埋葬習俗の一端を窺わせるものである。Ⅰ地区では、鉄釘や副葬遺物の出土状況等によって、木棺が使用された可能性のあるものが5基認められた。その他は土壇墓として扱ったが、中にはさらに木棺の用いられたものがあったかもしれない。Ⅲ地区では、9基のうち木棺使用例が6基あり、内1基は桶棺で、他は箱式棺である。

人骨が一部でも遺存したものは、Ⅲ地区の5基のみであったが、桶棺や円形に近いプランの土壇墓を除けば、埋葬姿勢は頭位を北に向けた側臥ないし仰臥屈肢葬と推定される。

副葬遺物としては、土師器皿・陶磁器碗・漆椀・櫛・鏡・銭・数珠玉などがあり、いずれかの副葬遺物を伴うものが、Ⅰ地区では33基のうち15基、Ⅲ地区では9基（うち2基は未完掘）のうち5基であった。これらのうちでは、土師器皿を伴うものが大半を占める。

Ⅰ地区の墓葬は、墓の切り合いがほとんどなく整然とした分布状況を示すことや出土土器からみて、室町時代末～江戸時代初頭の比較的短期間のうちに形成されたものと推定される。また、Ⅲ地区のものについては、ST-306・307がほぼⅠ地区と同時期のものであり、他は江戸時代前半～中頃に営まれたものとみられる。従って、Ⅰ地区の墓地は、Ⅱ・Ⅲ地区の建物群がほぼ廃絶する頃に出現し、さらにこの形成過程において、Ⅲ地区の墓地が現れ、以後に継続することになる。

こうしてみると、建物群と墓地とは、室町時代後半～末のある短い期間重複する可能性はあるものの、相対的には先後の関係にあることから、直接の関連性は薄いものと推定される。た

だⅠ地区の墓葬数からみると、墓地被葬者の帰属集団は、数棟からなる建物群単位の集団規模に対応するものである可能性が強いとみられる。墓地の被葬者集団の出自や性格等については、さらに今後検討を加える必要がある。

大日寺古墳の裾部の調査においては、周濠の一部を確認することができた。これによって、従来曖昧としていた墳丘規模や形状について、ほぼ推定が可能となり、田部盆地における最も古くて最大規模の古墳として位置づけられることとなった。

出土遺物は、量的にはさほど多いものではないが、墓の副葬品を主体として、室町時代末～江戸時代初頭の良好な一括資料を得ることができた。なかでも副葬土師器類は、当地域における土器編年において、貴重な基礎資料を提示することとなった。

#### 註

- 1) 菊川町「菊川町史(二)」(昭和60年)。
- 2) 山口県教育委員会「坂ノ上遺跡」(昭和49年)。
- 3) 山口県教育委員会「萩ヶ台遺跡Ⅱ」(昭和58年)。
- 4) 山口県教育委員会「小出遺跡」(昭和60年)。
- 5) 財団法人山口県教育財団・山口県教育委員会「田畑遺跡」(昭和61年)。
- 6) 前掲註4に同じ。
- 7) 前掲註5に同じ。

山口県埋蔵文化財調査報告 第101集

## 坂ノ上遺跡

—昭和61年度県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告—

昭和62年2月

編集 財団法人 山口県教育財団  
(山口市大手町2130)

山口県教育委員会文化課  
(山口市滝町1-1)

山口県埋蔵文化財センター  
(山口市春日町3-22)

発行 財団法人 山口県教育財団  
(山口市大手町2130)

山口県教育委員会  
(山口市滝町1-1)

印刷 瞬報社写真印刷株式会社  
(下関市大字清末1328番地)